

# イスファハーンのサファヴィー朝期の 住宅に関する一考察

深見奈緒子

はじめに

16世紀の末にイスファハーンはサファヴィー朝の首都となり、世界中にその名をとどろかせた。在りし日の佇まいは今もなお、ところどころにその影を残している。伝統的な都市構成は永年の都市民の営みの結晶であるとはいえ、400年前にアッバース I 世が英断したサファヴィー朝期の都市計画はその後の都市発展に大きく影響している。

彼は、王の広場とチャハル・バグ大通りを造営することによって、新たな都市の軸を規定した。人々を吸引し、留まらせる空間を構築したのである。その位置をみれば、双方とも、前時代からの市壁に囲まれた既成市街地（地図の点線内部）と市壁の外側にひろがる郊外との境界域を選んでいる。新市街地の発展は、旧市街地の南側、川の方へと向かう。そして、ザヤンデ・ルードを超え、対岸へとおよぶ。新市街地においては、迷路状の伝統的街路網ではなく格子状の街路が計画された。王の広場とチャハル・バグは、市壁で囲まれた囲郭都市を打ち破る概念を提示し、川を取り込んで旧市街と新都市を結び付けた。既存の市街地を否定した新都計画ではなく旧市街地との併存を試みた点や、中核都市と衛星都市という従来のイスファハーンのあり方を脱し、庭園を用いた広域都市の概念を持ち込んだ点は、サファヴィー朝期のイスファハーンの繁栄を編み出したひとつの要因であったのかもしれない。

サファヴィー朝期に帰するのは都市基盤ばかりではない。同期に建立された歴史的建造物も数多く、当時、かなりの建築資本が集中的に投下されたことが推察される。現存建築について、モスク、マドラサ、廟といったイスラームの宗教建造物についてはすでにある程度の考察を終えた<sup>(1)</sup>。本稿においては、サファヴィー朝期の住宅建築に関して、現存建築の調査と17世紀後半のイスファハーンを描いたシャルダンのイスファハーン誌<sup>(2)</sup>を対照させ、サファヴィー朝期の住宅像をとらえたい。

その順序として以下の手順を踏んだ。まず、現地調査あるいは既往の文献で確認し、サファヴィー朝期にさかのぼると推測される住宅建築と宮殿建築について、比較検討し、おおまかな類型をおこない、その典型例を紹介する。ただし、これらの対象遺構はその後の増改築が甚だしく、当初の状態を復元することは難しい。加えて、情報を得ることができるのは大規模で邸宅と呼ぶべきもの、ジョルファという新市街に建立されたアルメニア人のもの、王家の宮殿域に造られたもの等で、いわゆる庶民の住宅に関しては言及することはできないという偏りがある。

次に、シャルダンの著作に詳述された邸宅を検討し、現存建築の類型と照合を試みる。加えて、匿名の住宅あるいはペルシア人の住まいかたなどに関する記述を取り上げ、現存建築からは手の届かない部分を補完する。

## 1. 現存住宅とその実例

イランの住宅建築については数冊の紹介書やリストがあるだけで、体系的な建築史研究がなされているとは言い難く、サファヴィー朝期の住宅像も未だ闇に包まれている。既往の文献<sup>(3)</sup>にサファヴィー朝およびザンド期に遡ると記述があるイスファハーンの住宅建築をとりあげ(表1)、現地調査で可能な限り確認を試みた<sup>(4)</sup>。

東洋文化研究所紀要 第 139 冊

	No.	NAME	LOCATION	Reg.	Kara.	K	I.H.	Ganj.	R	調査・時代・現状		
非 現 存	A	Enāyati	Dardasht	1105		S				非現存		
	B	Mortadī 'Aṣmī	Ahmad-abad	1108		Sel				非現存		
	C	Ṭabīb Zādeh	Imamzadeh Ismail			S				非現存		
	D	Kalāntarṭhā	Imamzadeh Ismail			S				非現存		
	E	Neīfīd Ṭabrīzī	Dhul Faqar			S				非現存		
未	F	Mosawar al-Mulk	Mahale Nou	991		S	p.124	Q	○	Q 個人		
	G	Roughānī	Meidan-I Kohne	1103		S			○	Q 空家		
調 査	H	Akhwān Kharāzi	Sheikh al Islam	993		S			×	? 個人、爆撃		
	I	Hajj Muhammad Tuqī Lawāf	Ahmad-abad	999		S			×	? 個人		
	J	Muhammad Bāqer Nilfolūshān	Ibn Sina	1001		S			×	? 学校		
	K	Qadīmī Beherūz	Gozar Hakim	1099		S			×	? 空家		
街	L	Ayrji	Jolfa			S			P	×	? 個人	
	M	Karīmī	Dar al-Batikh			S	p.50		S	×	? 個人	
	N	Akafzādeh	Ahmad-abad			S	p.66		S	×	? 個人	
		Lawāfī Najād	?	1106		S					位置不明	
		Sadr Anaraki	?			S					位置不明	
Husein R'awafī	?			S					位置不明			
市 考	25	Kakh-I Safavi	Shahshahan			S			S	○	S 個人、分割	
	34	Sayyed Jawād Nayl	Masjid-I Mesri	1102		S				○	S 修理中	
	44	Rangrazhā	Ibn Sina	1104		S				○	S 個人、学校	
	17	Khowsh Newīs	Darb-I Imam			S	p.54-S			○	S 個人	
	48	Jamāl Qodsīeh	Darb-I Imam	996		Q	p.44-S p.59		×	S	? 宗教省	
	41	Imām Jomeh	Masjid-I Jami	1151		Q					○	S 修理中
	27	Sheikh Bahai	Masjid-I Jami			S			S	○	S 個人	
	49	Sheikh al Islām	Sheikh al Islam	997		S	p.80				○	S 修理中
	47	Muhammad Hasan Aftādeh	Golbahar			S					○	S 個人
	街 対	35	Abd al-Rasūl Rōḥānī	Ibn Sina	1002		S				○	S? 個人
31		Mojurudiyyān	Ibn Sina	1098		S				○	S? 個人、爆撃	
39		Rasūl Baqāt	Latfar	998		S				○	S? 個人	
36		Husein Kāmyabī	Ahmad-abad	1101		S				○	S? 個人	
43		Sayyed Kāzem Ārābī	Ahmad-abad			Sel				○	S? 宗教建築	
33		Akhwān Ḥaḡīqī	Chaharbagh Pa'in	992		Z	p.48-Z			○	S? 大学	
29		Beheshtiyān	Sheikh Bahai	1461		S-Q				○	S? 個人	
28		Hajj Ḥasan Sharāf	Gozar Hakim	1100		S				○	S? 空家	
30		Hajj Ḥasan	Dhul Faqar	1107		S				○	S? 空家	
新 市 街		42	Bozorgzād	Mahale Nou	1000		S				○	S 個人
	26&40	18	Rasūlīhā	Chaharbagh Pa'in				p.132-Z		×	S? 個人	
			Dawid	Jofa			S	p.118		○	S 大学	
	2	Mārtā Pītoruz	Jolfa	990	No.9-S	S		p.28		○	S 大学	
		22	Sūkyāsyān	Jolfa	994	No.2-S	S		p.86-S		○	S 大学
		37	Khwajah Petros	Jolfa		No.1-S	S				×	S
		46	Housep Amir Khan	Jolfa		No.3-S	S				×	S
		1	Agha Kamal	Jolfa		No.4-S	S				×	S
		45	Der Grigor	Jolfa		No.5-S	S				×	S
		20	Minass Kret	Jolfa		No.6-S	S				×	S
		38	Khwajah Voskan	Jolfa		No.7-S	S				×	S
		21	Khwajah Housep	Jolfa		No.8-S	S				×	S
		32	Karam Khan	Jolfa		No.10-S	S				×	S

Reg.=Registered Number, Kara.=Krapetian, K=Kiani, I=Iranian Houses, Ganj.=Ganjnameh, R.=Mr. Rahimiyan, Sel=Seljuqid, S=Safavid, Z=Zandid, Q=Qajarid, P=Pahlevi,

表 1 調査対象一覧

歴史的住宅の実情は、文化財としての登録は進んでいるものの、未登録のものも数多い。文化財として登録されたものの中にも個人所有で住宅として使われているものが多い。本来の所有者は革命以後テヘランや国外へと移住し、空き家のまま放置された住宅も目立つ。文化財保存事務所は公的所有となったものに修理をおこなうのが精いっぱい、多くの古い住宅は時代の波のもとに失われつつある。

## イスファハーンのサファヴィー朝期の住宅に関する一考察

1999年の現存状況を記録するために、先の文献に加え、イスファハーンの文化財保存事務所住宅担当のラヒミヤーン氏からの聞き取りをもとに、調査によって部分的にでもサファヴィー朝期の様式をもつ遺構がのこると判断できたもの<sup>(5)</sup>、または未調査ながらサファヴィー朝期あるいはザンド朝に遡るとの記述や情報があるものを地図上に示した(地図)。

表1のリストに基づいて現地調査をおこない、既にとり壊され新建築が建っていたり、居住者に調査を拒否されたり、名称に対応する住宅が不明なものを除いて、考察可能な住宅を選んだ。それらは32件であった(表1の考察対象)。

本来ならサファヴィー朝期建立の住宅に限って検討すべきである。しかしながら、サファヴィー朝期の住宅の遺構数は限られ、しかも後世の改築が多く当初の復原が難しい。住居系の建築という視点から、比較的当時の姿がよく残る宮殿建築を考察の対象に含めることとした。宮殿建築には現存しないけれども銅版画や古い写真に記録されたものも多い。これらも可能な限り検討し<sup>(6)</sup>、現存建築の不足部分を補う。宮殿建築として計20件(現存4件、非現存16件)を加えた(表2)。

住宅建築の実態を捉えやすくするために、後述する住宅の類型を考慮して、まずいくつかの現存住宅について詳述したい。イスファハーンに建立されたものの中から5例を選んだ。挿入した写真は調査時のもので、図面は復原案を示す。図中の一点鎖線はサファヴィー朝期に溯ると推定される基準線を、ハッチは後補の建築を現わす。なお、平面図は後述する主室の正面が下にくるように配し、断面図は主室正面から背面に切断面を接定した。以下、主室の正面を間口とよび、それに直交する方向を奥行とよぶ。

### 1-1. ジョルファのマールター・ピートルズ邸<sup>(7)</sup>(図1, 写真1, 2, 3)

ジョルファはアッバースI世が新たに計画したアルメニア人居住区で、本稿

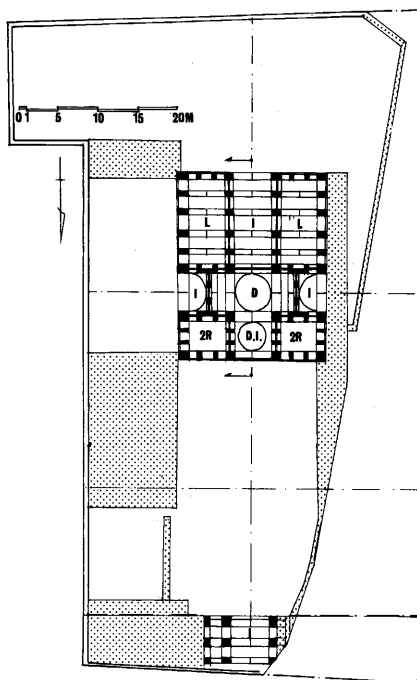


図 1-1 マルター・ピートルズ邸復元平面図

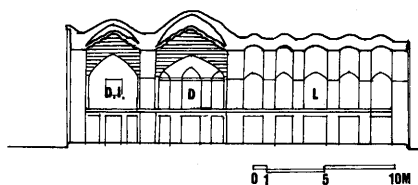


図 1-2 同主室断面図

で扱ったジョルファの住宅はすべて、本来はアルメニア教会に所属するキリスト教徒の住宅として建立されたものである。ジョルファの住宅地は、原則としては東西に伸びる大通り（ヒヤバーン）に面して南北に長い矩形の敷地を有する。このマルター・ピートルズ邸の敷地も古くは北側のヒヤバーネ・ハッガーニーからアプローチする敷地で、敷地の中央部、南寄りに独立建築が計画されたらしい。敷地自体は高い塀に囲まれ、独立建物を中心として周囲に庭園が設けられていたことが敷地および建物形状から推察される。1950年代に入り、敷地の西側にヒヤバーネ・ハキーム・ニザーミーが掘削され、敷地の北西側が道路用地のために削られた。これにより、西側の壁が独立住宅と接するようになる。現在はパルディ

ス大学の事務棟となり、周囲に3つの庭が区画されている。サファヴィー朝期に遡ることができるのは、元来は庭のほぼ中央に位置した建築である<sup>(8)</sup>。

独立建物は北面を正面とする。このため夏用の建築であったといわれる<sup>(9)</sup>。建物は、間口3室奥行3室の平面構成を有する。正面である北面の中央部には後補の非構造壁が設けられているが（写真1）、これを取り払えば、庭に向かって大きくアーチを開口させたイーワーンの形状を有する。この部分は中央部が

イスファハーンのスファヴィー朝期の住宅に関する一考察



写真1 マールター・ピートルズ邸, 正面外観

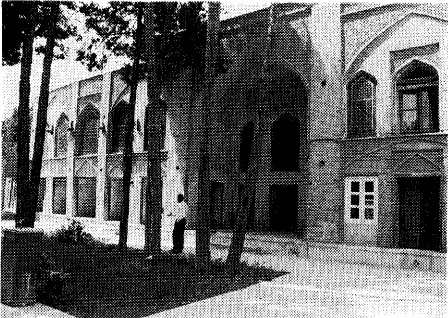


写真2 マールター・ピートルズ邸, 側面・イーワーン

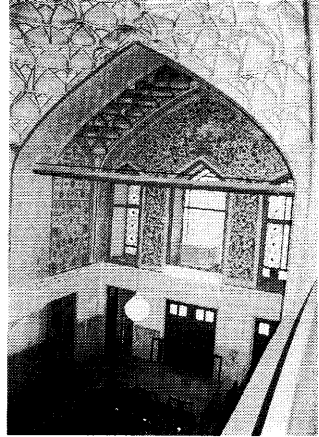


写真3 マールター・ピートルズ邸,  
ドーム室2階より東の袖部  
を撮影

高くなるムカルナスのドームを載ている(図1-2)。通例, イランのイーワーンはトンネルあるいはセミ・ドーム形のヴォールトをいただく。ここでは天井の中央が高いため, 開口アーチを壁でふさぐとあたかもドーム室のような形状になる。こういった形態は他の対象住宅にも頻出するので, 通常のイーワーンと区別するために, 便宜的に本稿において「ドーム・イーワーン(図中のD.I.)」と呼ぶことにした。

ドーム・イーワーンの背後は正面アーチと相似形の大アーチが開口し, 空間的な途切れなしに奥のドーム室(図中のD)へと続く(写真3)。このドーム室は東西に袖部をのばす。そして, 先のドーム・イーワーンと同じアーティキュレーションのムカルナス・ヴォールトを戴く。ドーム室の東西辺の庭側には,

奥行の浅いイーワーン（図中のI）が設けられ、袖部と接続する<sup>(10)</sup>（写真2）。一般に、イランの伝統的住宅には天井高が一際高く、とりわけ装飾に凝った接客用の部屋がある。本稿ではこういった部屋を便宜的に「主室」と呼ぶことにした。ここマールター・ピートルズ邸に関していえば、その装飾の様子から庭に北面するドーム・イーワーンとその奥のドーム室が主室である。

ドーム室の奥にあたる南側は、現状では2階となっているが、カラベティアンはこの木造床は後補のものであると述べる<sup>(11)</sup>。たしかにダヴォールと呼ばれる水平アーティキュレーションと床との取り合いがおかしい。南側にあたる部分は後補の2階部分を取り払うと、奥行の深い2室（図中のL）の間に、南へ向かって開くイーワーン（図中のI）が挟み込まれている。両脇の二室は、2層分吹き抜けの部屋の短手方向に複数の横断アーチを架け、その間をドーム・ヴォールトでつないだ架構をもつ。こういった部屋はサファヴィー朝期の住宅に頻出する。これを「横断ヴォールト室（図中のL）」と呼ぶことにした。横断ヴォールト室は通例ではイーワーンやドーム・イーワーンあるいはドーム室とほぼ同じ天井高をもち、主室の脇部屋の役割をすることが多い。建物の東立面をみれば、北側の2室分は高く、南側の2室分は軒線が一段低い（写真2）。両ファサードとも共通してサファヴィー朝様式の煉瓦風タイルで飾られている。

以上をまとめれば、サファヴィー朝期の復原案として間口3室奥行3室の構成をもち、囲庭の中に建てられた独立棟で、主室はドーム・イーワーンとドーム室を連結した部分で、北側を正面とするという特性が指摘できる。

## 1-2. ジョルファのスークヤース邸（図2，写真4，5，6）

ジョルファのタブリーズィー街区にある家で、北側のタブリーズィー通りと西側の細い通りとに画された角地にある。東どなりも元来はスークヤース家の所有する住宅で、二つの住宅は同族の人々によって使用されていたという。

イスファハーンのサファヴィー朝期の住宅に関する一考察

この西側住宅について詳述する。南北に  
ならぶ二つの中庭を有し、二つの中庭の間  
にあたる部分に部屋列を設けた住宅である。  
先のマールター・ピートルズ邸が囲庭にた  
つ独立建物であったのに対し、当スクヤ  
ース邸は敷地の境界壁が建物となり、建物や  
壁で矩形に囲まれた中庭をもつ点が異なる。

主室は二つの中庭に開くよう、庭を分割  
する横断辺におかれ、その正面は北である。  
一般に、二つの中庭境に主室棟が建つ形式  
をクーシュク形式と呼ぶ<sup>(12)</sup>。

北中庭は主室たる南辺の他は北辺のみに  
部屋を配し、東西の2辺は壁である。北中  
庭の北辺の諸室はカージャール朝期の後補  
ながら、道路と敷地の関係からサファヴィ  
ー朝期にも同様な建築があったことが推察  
される。南の中庭は北辺にあたる主室部以  
外は3方を壁で囲んでいる。

諸室の構成に目を転じれば、間口3室奥  
行2室の構成である。間口の中央部の北側  
には2本の長柱によって支えられた吹き放  
ち部分があり、寄木細工の平天井が架かる  
(写真4)。このような列柱吹き放し空間の  
ことを一般にターラールと呼ぶ。ターラ  
ールといえ、チェヘル・ソトゥーンの正面  
(写真18)やアリ・カプー上層が有名であ

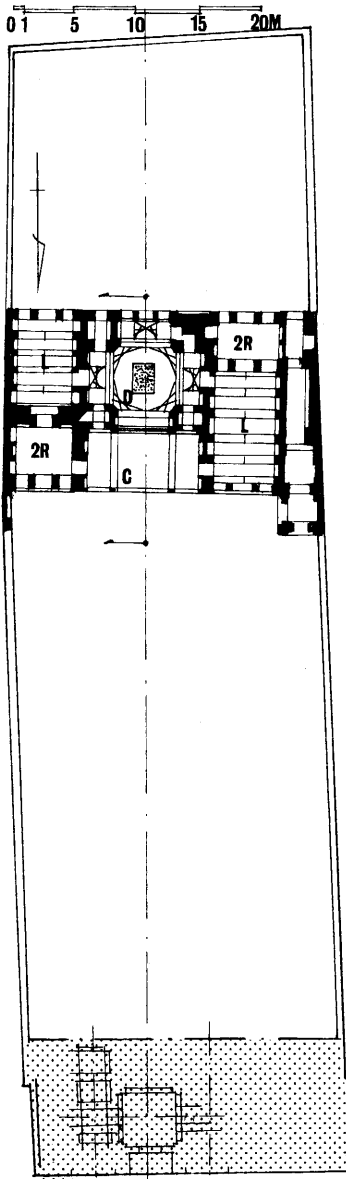


図2-1 スークヤース邸復元平面図



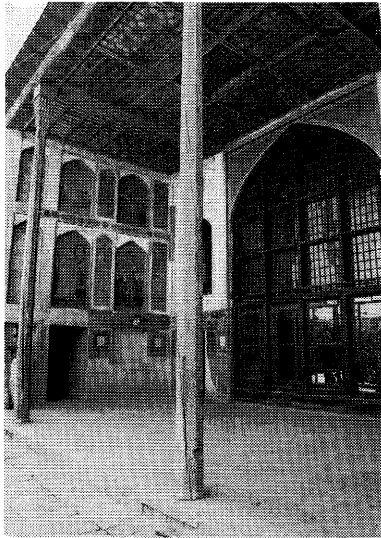


写真4 スークヤース邸, 列柱廊

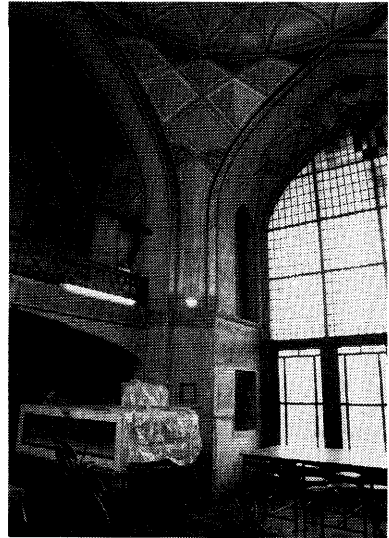


写真5 スークヤース邸, ドーム室

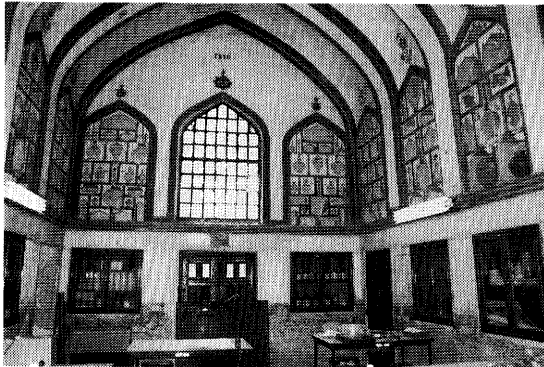


写真6 スークヤース邸, 横断ヴォールト室

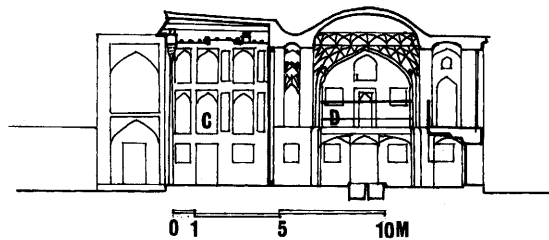


図2-2 スークヤース邸主室断面図

る。スークヤース邸の列柱空間は一般にターラールと呼ばれる部分と共通してはいるが、柱の列は1列で、しかも3方を壁で囲んでいる。本稿では柱列が複数の場合を「ターラール」、一列の場合を「列柱廊（図中のC）」と呼び、区別する。列柱廊の奥には、大きなアーチ形が開口し、ドームを戴くドーム室（図中のD）が続く（写真5）。ドーム室の中央には噴水のある水盤があり、列柱廊の向きにくわえて夏用の仕様であることを物語る。

ドーム室の西、南、東には中央のドーム室に向って開いた2階通廊が回っている。この通廊はグラーム・ギャルデシュと呼ばれ、召し使いのサーヴィス用の通路であったという。2階通廊には暖炉がつき、2メートルあまりの幅があり、しかも中央客間をみおろす位置にある。他の住宅やハシュト・ベヘシュトにも主室を見下ろせる部屋が出てくるので、このような部分には他の使用法があったのかもしれない。

列柱廊とドーム室の両脇では、奥行方向の分割が異なる。東側では、北室は狭く2層（図中の2R）で、南室は広く2層分吹き抜きの横断アーチをかけた部屋（図中のL）となり、西側はその逆である。横断アーチのかかる部屋は、先のマールター・ピートルズ邸で指摘した横断ヴォールト室で、南東の横断ヴォールト室の壁面にはトング・ポリーという壺型の凹部を重ねる装飾が残る（写真6）。

以上まとめれば、2つの中庭の間の辺に、間口3室奥行2室の6室を設けた2中庭式の住宅で、主室は北面する列柱廊とドーム室を連結した部分であるといえることができる。

### 1-3. ジョルファのダヴィード邸(図3, 写真7, 8, 9, 10)

この住宅はスークヤース邸と小路をはさんで隣り合うアルメニア人の住宅であったが、現在はパルディス大学の校舎として使われている。スークヤース邸と同じく中庭形式ながら、スークヤース邸では主室が表裏関係をなす二つの中

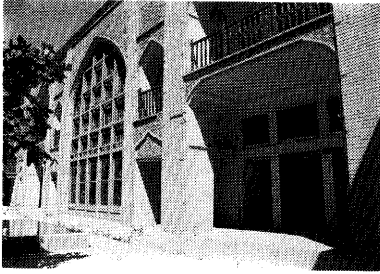


写真7 ダヴィード邸, 正面外観

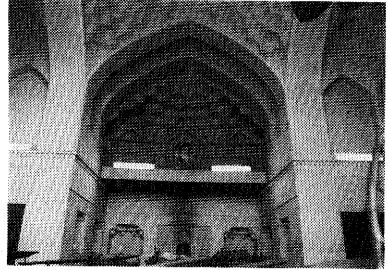


写真8 ダヴィード邸, ドーム・イーワーン

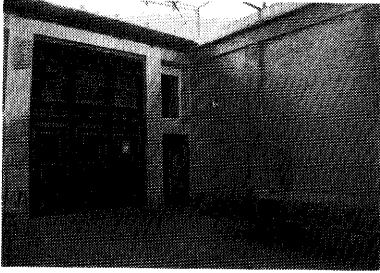


写真9 ダヴィード邸, ナレンジェスターン正面外観

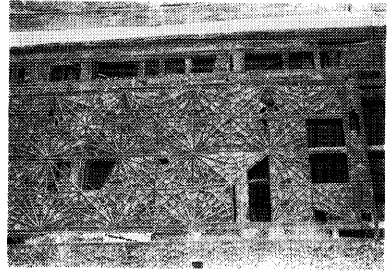


写真10 ダヴィード邸, サファヴィー朝期のオロシー

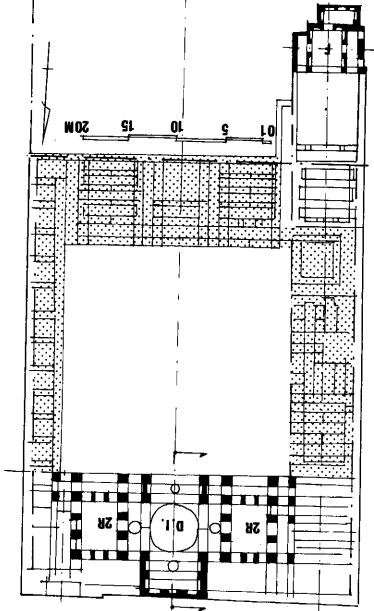


図3-1 ダヴィード邸復元平面図

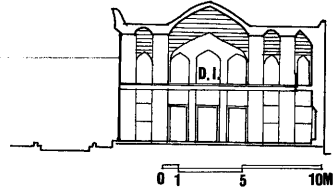


図3-2 同主室断面図

庭にむかって開口していたのにたいし、ここダヴィード邸では主室がひとつの中庭に向かってだけ開く。

この住宅にはスファヴィー朝期に遡ると推測される大小二つの中庭がのこる。大中庭の諸室は南向きで冬用、その構成は間口3室奥行1室である。一方、小中庭の室は北向で夏用、その構成は間口1室奥行1室である。

カージャール朝期には、現存する大中庭がピールーニーと呼ばれる接客用の公的な中庭として北側に位置し、非現存ながらアンダールーニーと呼ばれる家族用の私的な中庭が、大中庭の南側に位置していたという。加えて、現存する小中庭がナレンジェスタンと呼ばれ、その中間の西側に位置していた。このうちスファヴィー朝期に遡るのは大中庭の北辺部と小中庭の南辺にある1室だけである。

北の大中庭の南辺がスファヴィー朝期にどうなっていたのかは不明ながら、南辺に接続する同期の小中庭の位置から、いまの中庭とほぼ同規模の中庭があり、現在の南側ファサード部分になんらかの建築があったことが推察される。ただし壁となっていたのか、それとも部屋列が設けられていたのか、あるいはスークヤース邸のように2中庭を隔てる棟がたっていたのかはわからない。本稿ではスファヴィー朝期に遡る諸室の部分に限って論述する。

大中庭の北辺の中央部は、大きなアーチ形が開口し、先のマルター・ピートルズ邸と同様なムカルナスで飾られたドーム・イーワーン（図中のD.I.）である（写真8）。この平面は前後左右に腕を伸ばした十字形で、正面の大アーチの両脇、左右の腕部分に入口通廊が設けられ、スークヤース邸のドーム室と似ている。相違点は、ダヴィード邸のドーム・イーワーンは直接戸外に面し、スークヤース邸のドーム室は列柱廊の背後にある。このドーム・イーワーンの2階通廊は奥部のみで、両脇は2層の居室（図中の2R）となり、上階の居室からドーム室を見渡せる。このように2階の部屋から吹き抜けの部屋を見下ろす形式は、カージャール朝期の住宅にも多数の実例があり、2階の間仕切りに

はオロシー（色ガラス入木製揚げ戸）がはめ込まれることが多い。2階の部屋については宴会のときに女性が見下ろすための部屋だという説もあるが真偽のほどは不明である。

一方、小中庭の南辺にある間口5m奥行4mあまりの夏用の部屋は、平天井の部屋（図中のF）である（写真9）。間口の両端に入口をもうけ、間のスパンをステンド・グラスを用いた揚げ戸とする。揚げ戸の上部にはサファヴィー朝期の格子細工が残る（写真10）。

以上まとめれば、大小2つの中庭を有する住宅で、大中庭に大きな南向主室、小中庭に小さな北向主室がある。先述した2例はいずれも大きな中庭だけを有する例であったが、ここでは小中庭に面する瀟洒な主室にも贅をこらした装飾がなされた点に注目したい。また先述した2例はいずれも奥行が2間以上の例であったが、ここでは奥行1間である点が重要である。

#### 1-4. イマーム・ジョメー邸（図4, 写真11, 12, 13）

先の3例がジョルフアというサファヴィー朝期に計画されたアルメニア人居住区にあり、アルメニア教徒の住宅であったのにたいし、イマーム・ジョメー邸は旧市街の核ともいべきマスジディ・ジャーミの北側にあり、しかも代々イスラーム教徒の宗教指導者の家であったという。現状では、その敷地の不整形さに加えて、カージャール朝、パフレヴィー朝の増改築により3つの中庭が結合した複雑なプランをもつ。イスラーム革命の後にバハイー教徒の宗教家が隔離され周辺住民の攻撃を受けたことや、近傍のマスジディ・ジャーミにイラクからのミサイルが落ちたことが重なって破損が甚だしい。そのため復原はかなりむずかしい。

南東の中庭に残るハウズにはサファヴィー朝期に特有の獅子の像が刻まれる。この中庭の周囲には南東辺を除く3辺に部屋が配されている。北西辺に豪華に装飾された主室があり、その北東に連なるハウズ・ハーネ（泉水の間、図中の

イスファハーンのサファヴィー朝期の住宅に関する一考察



写真11 イマーム・ジョメー邸, 正面外観

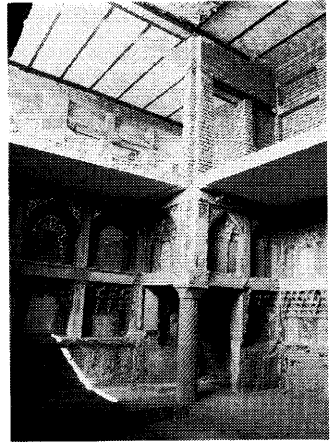


写真13 イマーム・ジョメー邸,  
ハウス・ハーネ



写真12 イマーム・ジョメー邸, 平天井室

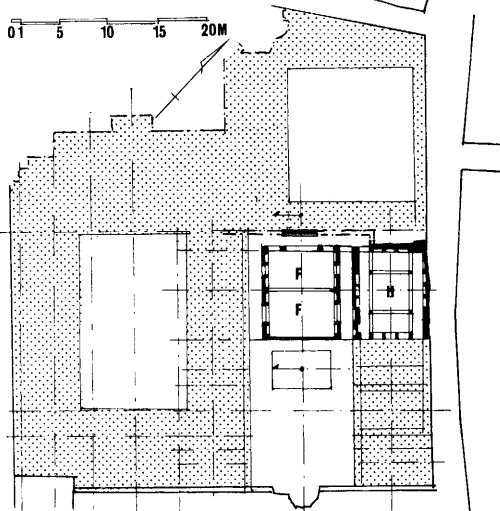


図4-1 イマーム・ジョメー邸復元平面図

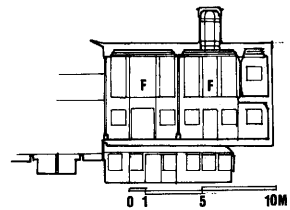


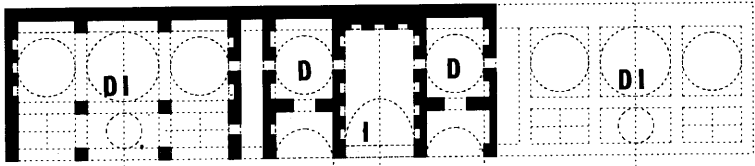
図4-2 同主室断面図

H) の部分とともにサファヴィー朝期に遡るようだ。主室部分は間口は 1 室ながら奥行は 2 室に区分され、2 室とも平天井で覆われ (図中の F)、奥の部屋には明かり取りのランタンがある (写真 11, 12)。ホуз・ハーネの天井高は主室と同レベルで、しかも豊かなサファヴィー朝期の装飾が残っているので主室の連続部分とみなしてよいだろう (写真 13)。主室を中心としてホуз・ハーネと反対側は軒線が低くなる。ここは、カージャール朝期に南西の中庭が改築された時に改変されたようだ。本来は主室に関して対称にホуз・ハーネ同様天井高の高い部屋が配されていたと考えたい。したがって、本来は中庭がひとまわり広く、北西辺の 3 室が主室部分となっていたと推察される。

主室レベルは中庭レベルより 120cm ほど高く、地下に天井高 2.5m あまりの地下室がある。主室部分は、前後の 2 室をあわせるとほぼ平面は正方形で、同高の平天井を戴く。2 室の境には、正方形平面の中央部を横断する高さ 20cm あまりの敷居が走り、主室部分は中庭側と奥側の長方形の 2 室にわけられる仕組となっていた。境の間仕切りとして中庭に面する部分および、2 室の境界には組木細工のオロシーとよばれる揚戸が入っていたらしい。その様子はカージャール朝期に同じ手法で増築された南西中庭の主室から推し量ることができる。

奥行 2 室をあわせた主室部分には、3 方に 2 階通廊がまわる。2 階通廊の北東側は、ホуз・ハーネの周囲を巡る 3 階通廊部と一体化している (写真 12)。ホуз・ハーネの床レベルは中庭レベルとほぼ等しく、中央には正方形の泉 (ホーズ) が掘り込まれる。この 4 隅には石製振柱がたち、吹き抜けとなる。上層は崩壊し、極彩色のスタッコ天井が崩落し、復原工事がなされていた。本来、このホーズ・ハーネは 3 層の回廊が取り巻き、最上層からは階下の泉だけではなく、隣の主室をも見下ろせるように造られていた (写真 13)。

以上まとめると、ひとつの中庭に部屋を配する中庭形式で、奥行 2 室の平天井室とホуз・ハーネをもつ。先の 3 例の主室が共に北向で夏用であったのにたいし、この住宅は南東向きの平天井室は冬用の主室、ホуз・ハーネは床レ



14  
N

図5 カーヘ・サファヴィーの模式平面図

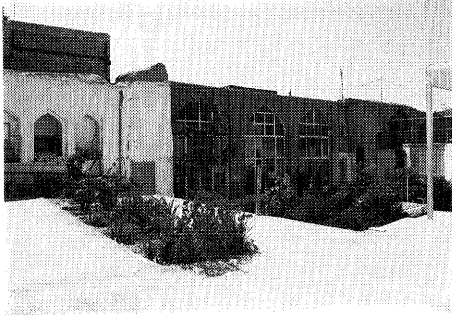


写真14 カーヘ・サファヴィー，正面外観

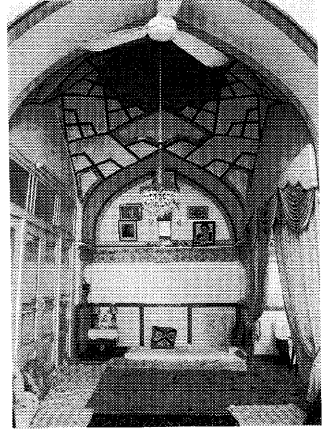


写真16 カーヘ・サファヴィー，  
東側面中央ドーム・イーワーン

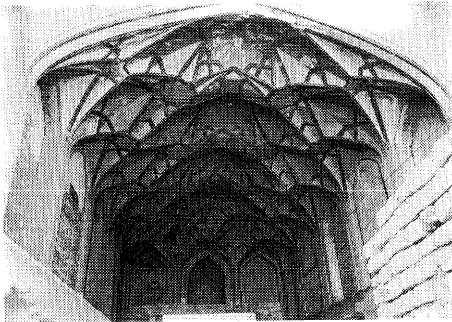


写真15 カーヘ・サファヴィー，イーワーン

ベルも低く水を用いているので夏用の主室とみなすことができ、季節による主室の使い分けがなされたと考えられる。

1-5. カーヘ・サファヴィー (図5, 写真14, 15, 16)

旧市街地の北門であるトクチャー門の近傍に位置し、1924年の地図と対照させると、矩形の広大な庭園の南側辺をしめる建築であったことがわかる。今は庭



園跡はなく住宅がたてこみ、かつての建物の西端 3 分の 1 は新たな建築に取って代わり、残りの部分は 2 部に分断され個人住宅として使われている (写真14)。

可能な限り復原すれば、間口 9 室奥行 1 室の室構成をもち、各室はともに北に向って開く。中央はムカルナスで飾られたイーワーン (図中のI, 写真15) で、ひときわ華美な装飾を有する。中央イーワーンの両脇の室は、前面に奥行の浅い凹部があり、奥にドームを架けた部屋が続く (図中のD)。その脇には細い通廊があり、さらにその両脇に 3 室からなる広間が接続する。この広間は前面に腕を伸ばした 3 つのドーム・イーワーン (図中のD.I.) を併置したものである。中でも中央部分が高く装飾も豊かである (写真16)。すなわち間口は中央と左右の三部構成で、各部ともにそれぞれ 3 室からなる計 9 室からなり、各々が中央と両脇という構成をもっている。

いままでの 4 例の中庭よりかなり規模のおおきな庭の辺に造られた建物で、三部構成を 3 つ重ね、北向の主室はイーワーンを用いている。おそらく、広大な庭園を囲って壁あるいは建物が立ち、その辺部南側につくられた主室部分であったと考えられる。

## 2. 現存住宅の類型検討

逆戻りになるが、上記の五棟を選んだ類型の方法について述べたい。

### 2-1. 既往の分類

まず、既往の研究に記された類型を調べてみよう。ジョルファの住宅を詳述したカラペティアンは、庭と建物との関係に注目してAからDの4分類を行ったうえで、それぞれの特殊な場合を注記し8つに分類する (図6)<sup>(13)</sup>。A. 囲庭内に独立する建物で北周壁に冬用の建物をもつこともある (上述のマルター・ピートルズ邸に対応)、B. 南北に長く平行する周壁を東西に走る横断建物で 2

イスファハーンのサファヴィー朝期の住宅に関する一考察

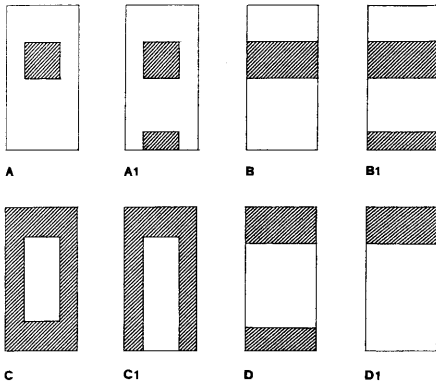


図6 カラペティアンの類型

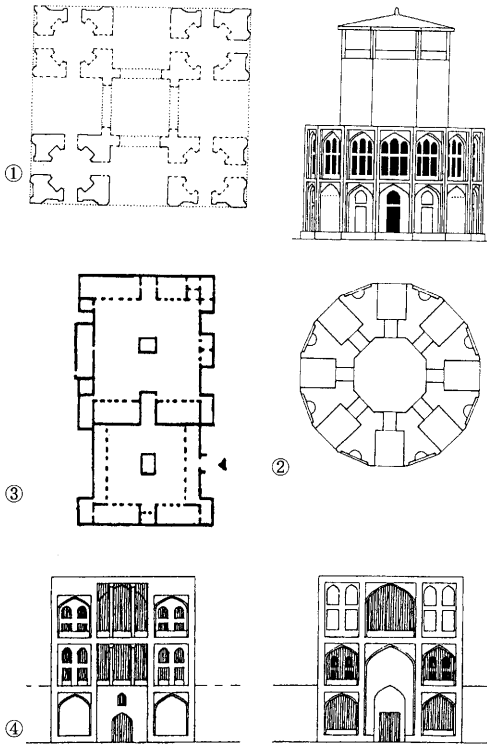
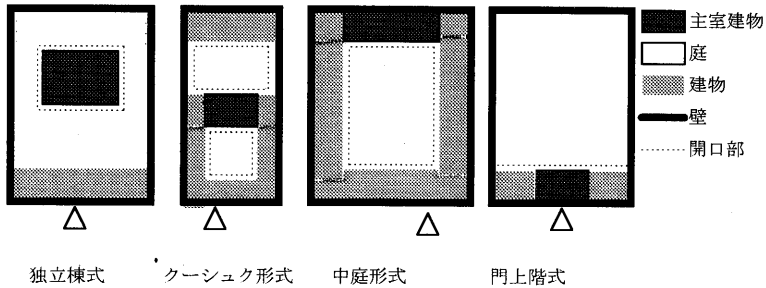


図7 クライスの類型

分する形式で、北端壁に冬用の建物をもつこともある（上述のスークヤース邸に対応）、C. 中庭式で、中庭の4方、あるいは3方に建物を配する（上述のイマーム・ジョメー邸に対応）、D. 中庭の南北辺に建物をもつ形式で南辺の建物を欠く場合もある（上述のダヴィード邸に対応）。これらはジョルファのように南北に長い短冊形の敷地が連なる計画市街地においては有効な類型であるが、旧市街のように、敷地が不整形で、敷地自体が長い歴史を有する住宅に適應する場合には、方位に関する制限を緩和する必要がある。

サファヴィー朝期の宮殿を研究したクライス<sup>(14)</sup>は、ササン朝以来の宮殿の3軸構成に注目しながらサファヴィー朝期の遺構にみられる3形式を補い、暗に4つのタイプを提案する（図7）。①ササン



独立棟式

クーシュク形式

中庭形式

門上階式

(建物部分は欠ける場合もある)

図 8 庭と主室の位置による類型

朝期のサルヴィスタンの宮殿のように平行する 3 軸を基本とするパヴィリオンで、そのうち特殊な場合が 5 の目プランとなる、②庭園内や山頂にたつ 8 角あるいは 16 角平面のパヴィリオン、③郊外にたつ中庭形式のキャラヴァン・サライ・タイプ、④門の役割をする建物でターラールを備えることもある。クライスの研究は宮殿が対象であり、そのまま住宅建築の類型に汎用することは適当ではない。

## 2-2. 庭と主室の位置による分類

カラベティアンとクライスによってなされた庭と建築との関係を本稿の遺構にあうように再整理する<sup>(15)</sup>。主室のある建物に注目し、庭との位置関係を調べると、以下の 4 つに分けるのが適当である(図 8)。①塀などで囲われた庭の中に独立建築がたち、そこに主室が設けられる場合；「独立棟式」と呼ぶ、代表例はマルター・ピートルズ邸、②中庭を二つ連ねたもので、二つの中庭の間の部分に主室のある建物が設けられ、主室が両中庭に向かって開く場合；「クーシュク形式」と呼ぶ、代表例はスクヤース邸、③同様に中庭をもち、中庭の辺にあたる部分に主室があり、主室がひとつの中庭に向かってだけ開く場合；「中庭形式」と呼ぶ、イマーム・ジョマー邸、ダヴィード邸、カーヘ・サファヴィー

が代表例、④門の上階に主室をおく場合；「門上階式」と呼ぶ、代表例はアリ・カプー、に大別できる。

表2は、庭と主室の位置に関する種類の順に考察対象をならべたもので、後述する主室の構成要素に着目した模式図を書き添えた。模式図中でトーンをかけた部分が主室を現わす。それぞれの類型毎に実例を辿ってみよう。

「独立棟式」は、現存建築では、庭園の中になつ宮殿建築（チェヘル・ソトゥーンNo.4とハシュト・ベベシュトNo.3）、2棟のジョルファの住宅（マールター・ピートルズ邸No.2とアガー・カマル邸No.1）のみである。

非現存のものは、ヨーロッパ人旅行家のスケッチや写真にいくつか見受けられる。まず、17世紀にイスファハーンを訪れたケンベルの描かせた宮殿域の鳥瞰図中に以下の独立棟式の宮殿建築が描かれている。チェヘル・ソトゥーンNo.4（現存）、ターラーレ・タヴィーレNo.13<sup>(16)</sup>、バーゲ・ボルボル<sup>(17)</sup>、エマーラテ・ゴルダステNo.5<sup>(18)</sup>（図7）、バーゲ・ハルガNo.6<sup>(19)</sup>、ウチ・マルタベNo.9<sup>(20)</sup>があげられる。彼が描いた上記以外の建物では、単独の銅版画にアサド・アーバード宮殿No.15<sup>(21)</sup>があり、スケッチにヘザール・ジャリーブの中央建築No.16<sup>(22)</sup>がある。

上記以外の独立棟式の宮殿では、19世紀半ばの著作に挿入された絵画として、建築家コステの手によるターラーレ・アーイーネNo.14<sup>(23)</sup>、ユーズークチャーンの建築案内書のグーチェ・ハーネNo.10<sup>(24)</sup>、ハフテ・ダストNo.12<sup>(25)</sup>、クーエ・ソファ<sup>(26)</sup>がある。19世紀末にイスファハーンに滞在したドイツ人医師ホルツァーの写真帳には、上記のいくつかの宮殿のほかにはバーゲ・ゼレシュクNo.11<sup>(27)</sup>、ナマクダンNo.8<sup>(28)</sup>がとりあげられる。

なお、庭園建築には今まで述べたような大建築のほかにも、いくつかの小規模な亭が独立棟式で建てられている。ケンベルのスケッチにあるヘザール・ジャリーブの八角形の亭<sup>(29)</sup>、シャルダンの著作に挿入されたサーデト・アーバードの4つの亭<sup>(30)</sup>などがあげられる。

No.	名称(参照文献)	所在地	向き、備考	間口×奥行	模式平面図
独 立 棟 式	1	カガム邸 (Karapetian4)	北向	3 3	
	2	マクダーン邸 (Karapetian9 G. N. p28-)	北向	3 3	
	3	ハシュト邸 チャハル・バーグ浴い	北向	5 5	
現 存	4	チェヘル・ソルターン 宮殿域	北東向	5 5	
	T=ターラール、C=列柱廊、F=平天井 D=ドーム・イーワーン、I=イーワーン D=ドーム室、L=横断ウオール室 R=部屋、G=通路、頭の数=層数				
独 立 棟 式	5	エマラテ・ゴルダ (Alemi, Fig. 20)	四面	8(16?)角形	
	6	バーゲ・ハルガ (Alemi, Fig. 23)	四面	8角形	
	7	ハシュト邸の東の亭 (Kleiss, p274, fig3)	四面	3 3	
現 存	8	ナマクダーン (Holtzerp. 183)	四面	3 3	
	9	ウチ・マルカ (Alemi, Fig. 10, 16)	東西	3 3	
現 存	10	ウチ・ハネ (Yuzukchyan, pp. 58-60)	東西	3 3	
	11	バーゲ・ゼレシュカ (Holtzer, pp. 180-182)	東向	3 2	
現 存	12	アフ・ダスト (Holtzer, pp. 178-9)	西向	5 2	
	13	ターラレ・カグイ (Kaempfer, Olearius Necipoglu, fig16, 17)	東向	3 3	

これらの独立棟式の諸例を建築の構成によって整理し表2に並べた<sup>(31)</sup>。まず、中央ドーム室の周囲に部屋を配した多角形平面で、立面各面が等価となる点対称の建築がある。エマラテ・ゴルダステNo.5(図7-②)、バーゲ・ハルガNo.6がこれに相当する。

次に、上記同様にドーム室を中心に周囲を部屋列で囲み、加えて直交軸を考慮する。さらに全体を正方形平面に適応させ、軸上にイーワーンを配すると、5の目プランが生じる<sup>(32)</sup>。4面が等価な5の目プランの実例には、ハシュト・ベヘシュトの東の亭No.7(図7-①)、ナマクダーンNo.8がある。3番目に5の目プランを基本にしなから、建物の正面性を考慮すると、

表2 考察対象の形式別リスト①

イスファハーンのサファヴィー朝期の住宅に関する一考察

No.	名称(参考文献)	所在地	向き、備考	間口×奥行	模式平面図
独立棟式	14	ターラーレ・アーイーネ (Coste) 川沿い	北向 ターラーレに泉	3 4	
	15	アザド・アハメド (Kaempfer Necipoglu, fig19) 川沿い	? ?	3 ?	
	16	アザド・アル・ジャリブ (Alemi, Fig14) 川の南岸	北向 ターラーレに泉	3 4	
クイッシュ形式	17	カシュナク・イス邸 旧市街	南向	3 1	
	18	ラスリーハ邸 (G. N. pp132-139) 新市街	西向	3 1	
	19	ターラーレ・アシュラフ 宮殿域	南向	3 1	
	20	ミハ・クレト邸 (Karapetian6) ショルフア	北向	3 1	
	21	カセフ邸 (Karapetian8) ショルフア	北向 ドーム・イランに泉	3 2	
現形式	22	スカーズ邸 (Karapetian2) ショルフア	北向 ドーム室に泉	3 2	
	23	カハ・ハルガフット (Necipoglu, fig10) 宮殿域	東向 平天井室に泉	? 1	
非現形式	24	カハ・ハルガフット (Alemi, Fig19) 宮殿域	南向 列柱廊に泉	1 1	
	25	カハ・ザファグイ、旧市街	北向	9 1	
中庭形式	26	ダグイッド邸、ショルフア	北向	1 1	
	27	シェイフ・ハハ邸、旧市街	西向、地下	1 1	
	28	ザラフ邸、旧市街	南向	2 1	
	29	ベヘシュトイーン邸、旧市街	南向	3 1	
	30	ハジ・ハサン邸、旧市街	南向	3 1	
	31	モジュレディヤン邸、旧市街	南向	3 1	

表2 考察対象の形式別リスト②

多少の変形が生ずる。ハシュト・ベヘシュトNo.3の平面は不等辺八角形で南北軸方向に長い。列柱廊の位置と大きさや2階通廊のもうけ方から、北側を正面として計画されたといえる。同類はウチ・マルタベNo.9, グーチェ・ハーネNo.10, ジョルファの住宅2例No.1, 2(図1)で、外形は長方形平面である。

4番目に、上記2種は奥行が3室以上であるが、独立棟式ながら奥行が2室で、翼部を加えた例がある。バーゲ・ゼレシュクNo.11, ハフテ・ダストNo.12がその例である。

最後に、ターラール空間を付加して建物の奥行を増し、より正面性を強調した例がある。ターラーレ・タヴィーレNo.13, ターラーレ・アーイーネ

	No.]名称(参照文献)所在地	向き、備考	間口×奥行	模式平面図
中	32 カラム・ハン邸 (Karapetian10-1)シ'ヨルフア	北向	3 1	
	33 ハギ・キー邸、旧市街	南西向	3 1	
	34 シ'ワド・ナール邸、旧市街	南向	3 1	
	35 ロ・ア・ニ邸、旧市街	南向	3 1	
	36 カ・ム・ビ邸、旧市街	南向	3 1	
庭	37 ベト邸 (Karapetian1)シ'ヨルフア	北向	3 1	
	38 ウ・オスカー邸 (Karapetian7)シ'ヨルフア	北向	3 1	
形	39 バ・グ・イ邸、旧市街	南向	3 1	
	40 ナウ・イト邸、シ'ヨルフア	南向	3 1	
式	41 イマム・シ'ヨメ邸 旧市街	南向	1 2	
	42 ホ・ザル・ガ・ザド邸 新市街	南向	1 2	
	43 ア・ラビ邸 旧市街	北向	1 2	
	44 ラウカ・ラス・ハ邸 旧市街	南向	3 2	
	45 テル・ク・リコル邸 (Karapetian5)シ'ヨルフア	北向	4 2	
	46 アミール・ハン邸 (Karapetian3)シ'ヨルフア	南向	3 2	
	47 ウカチ邸 旧市街	南向	3 2	
現	48 ゴド・シ邸 旧市街	北向	3 2	
	49 シェイフ・アル・イスラム邸 旧市街	北向	3 2	
	50 リ・カフー 宮殿域	東向	3 4	
門上階式	51 門上階建物 52 門上階建物	(Holtzer, p. 199)チャハル・ハーグ 沿い (Necipoglu, fig12)チャハル・ハーグ 沿い		

No.14アサド・アーバード  
No.15,ヘザール・ジャリー  
ブの中央建築No.16があげ  
られる。

なお、これらの建物は  
広大な庭園の中央部に計  
画される場合が多いが、  
独立建物が庭園の端に偏っ  
て計画される場合もみら  
れ、ひとつの庭園内に間  
隔を置いて2棟が設置さ  
れることもある。

「クーシュク形式」の  
範疇には、庭園区域にた  
つ宮殿建築としてターラ  
レ・アシュラーフNo.19,  
住宅としては5件No.17,  
18, 20, 21, 22 (図2)  
が現存する。全て間口は  
3室構成であるが、奥行  
が1室の場合とスークヤ  
ス邸No.22のように奥行が  
2室の場合があった。こ  
れらは2つの中庭を有す  
るとはいえ、開口部の設  
けかたをみると2つの中

表2 考察対象の形式別リスト③



写真17 カーシャーンの門上階式宮殿の写真（非現存）

庭が等価に扱われたのではなく、表庭と裏庭のような使い分けがなされていたことが推察される。非現存のものを列挙すると、カーヘ・ハルヴァットの庭の西No.23と北No.24に位置する2棟の建物があげられる<sup>(33)</sup>。

なお、以上8例を後述する主室の分類によって整理すると、①奥行1室で平天井室を主室とするのがホシ

ユ・ネヴィース邸No.17、ラスーリーハー邸No.18<sup>(34)</sup>、カーヘ・ハルヴァットの西側建物No.23、②奥行1室でドーム・イーワーンを主室とするのがターラーレ・アシュラーフNo.19、ジョルファのミナス・クレット邸No.20、③奥行2室とし、ドーム・イーワーンの背後に2層の部屋を接続させたジョルファのハウセップ邸No.21、④奥行2室で、列柱廊の背後にドーム室を有するスーク・ヤース邸No.22とカーヘ・ハルヴァットの北側建物No.24にわけることができる。

「中庭形式」の範疇には、比較的多数の実例が属する。本来なら中庭四辺のうち何辺を部屋列が占めていたかを考えたいのだが、現存住宅は度重なる増改築を経ており、中庭の状況を復原するのは困難である。まず、カーヘ・サファヴィーNo.25のように広大な庭園の辺に諸室を設ける場合は、クライスのあげる郊外のキャラヴァン・サライ・タイプの実例（図7-③）とあわせて考えることが可能であろう。のこりのいわゆる都市内の中庭住宅に関しては、主室を含む辺の間口と奥行に注目し、主室を構成する要素から考えることが適当である。おおまかには、奥行が1室の場合15例（No.25～40）と2室の場合9例（No.41～



49) に分けられる。

これらの細分類については、後述する主室形状を考慮すると以下のように考えることができる。①奥行 1 室で平天井室；ダヴィード邸のナレンジェスターン（図 3）等 5 例（No.26～30），②奥行 1 室でドーム・イーワーン；ダヴィード邸（図 3）等 10 例（No.31～40），③奥行 2 室で前面が平天井室；イマーム・ジョマー邸（図 4）等 4 例（No.41～44），④奥行 2 室で前面がイーワーン；2 例（No.45, 46）<sup>(35)</sup>，⑤奥行 2 室で前面がドーム・イーワーン（No.47, 48）；2 例，⑥奥行 2 室で前面が列柱廊；1 例（No.49）となる。

最後に門上階式の現存例はアリ・カプーNo.50 だけであった。非現存ながらカーシャーンにも同様な宮殿の写真が残る（写真17）。銅版画や写真には、チャハル・バーク両側にならぶ庭園の入口部分に 2 層構成の門建築がある<sup>(36)</sup>。ただしこれらは奥の庭園中央に主建物があったと思われる。門の上階に部屋をおく形態は、サファヴィー朝期の宮殿や庭園に用いられたといえよう。サファヴィー朝期の住宅に門の上階に主室をおく形態が存在したかどうかは、さらなる検討が必要である。

### 2-3. 主室部分の構成

先に詳述した 5 棟の状況からもわかるように現存住宅はサファヴィー朝期の建立とはいいながらその後かなりの増改築があり、当時の状況は不明な点が多い。しかもサファヴィー朝期の建立であるとの判断基準は主室になされた装飾様式によることが多く、当時の中庭の個数やどの辺部に室が配されていたかということをとどめる例は少ない。そこでより細かな指標として、主室部の構成に着目することが適当である。

主室部分の分析は 2 段階に分けて行いたい。まず、主室部分が間口・奥行、何室ずつで構成されているのかという点を整理してみた（表 2 に間口および奥行の室数を表記）。



写真18 チェヘル・ソトゥーンのターラール

間口は3室が大半を占め、1室あるいは4室以上は少数である。間口方向は庭の大きさによってハフテ・ダストNo.12やカーヘ・サファヴィーNo.25のように長大な建築とすることも可能であるが、旧市壁内や新住宅地では、住宅敷地に適応する

ものとして、3室構成が好まれたようだ。間口を3室とすることは、庭の広さの決定にも寄与していると思われる。広大な敷地を有する場合には、イマーム・ジョメー邸のようにいくつかの中庭から構成され、巨大な中庭空間をとることは少ない。

奥行は1室と2室が多く、3室以上の場合は先の分類で独立棟式に分けられるものだけである。採光や換気的面から考えると、中庭に対して奥行は2室か1室が適当で、それ以上に奥行をますには、周囲をオープン・スペースとする独立棟式が採用されたのであろう。

このような分布状況なので、奥行を主室をみる場合の指標とすることが適当と判断した。主室の典型例として、①奥行1室の場合（ダヴィード邸、カーヘ・サファヴィー）、②奥行2室以上の場合（イマーム・ジョメー邸、スークヤース邸）、③奥行3室以上の場合（マルター・ピートルズ邸）にわけることができる。

主室部分の分析の2番目は、主室の構成要素に着目することである。主室の天井高は2層分が吹き抜けとなり、他の諸室よりも高くなる傾向がある。天井高の高い部屋としては、先の5件の実例に示したように、①ターラール（写真18）、②列柱廊（写真4）、③平天井室（写真12）、④イーワーン（写真15）、⑤

ドーム・イーワーン（写真 8）、⑥ドーム室（写真 3）、⑦横断ドーム室（写真 6）に注目できる。

「ターラール」は細く高い木柱を列状に並べ、この柱列を 2 列以上繰り返す多柱式の空間で、柱間には木製の平天井がかかる。3 方を吹き放し、残る奥辺を部屋に接続させるのが通例である。現存遺構としては宮殿建築にだけ現れる形態で、住宅遺構に実例はない。先述したターラール・タヴィール No.13 他、史料に残るターラール空間も、宮殿建築もしくは庭園建築に属する。ババイーはターラールに関して中央アジアやアゼルバイジャン地方にサファヴィー朝期以前から存在した柱を用いた技法を、特殊な役割を果たす宮殿建築へと導入した結果であると説く<sup>(37)</sup>。

「列柱廊」は、先述したようにターラールの奥行を 1 列だけにし、側面を壁でふさいだ形で、ターラールの簡略形ととらえることができる。ハシュト・ベヘシュト No. 3 およびチェヘル・ソトゥーン No. 4 側面と、スークヤース邸 No. 22 とシェイフ・アル・イスラーム邸 No. 49 の現存実例がある。なお、柱列は一列ながら奥行を狭くし、柱の本数を増した例がカージャール朝期以後の中庭式の住宅に散見される<sup>(38)</sup>。これらを考え合わせると、木造架構の空間を住居系の建築に採用した場合に、サファヴィー朝期の宮殿建築ではターラール空間、特別な邸宅建築では列柱廊という形がとられ、その後カージャール朝期に、列柱廊はより表象的な形態となって多くの住宅に普及したといえよう。

「平天井室」は、サファヴィー朝期の列柱廊の柱間空間に間仕切りをいれて室内化したような形態である。軒をみると、ターラール、列柱廊、平天井室ともにそりがあがった形状は同じである。（写真 4、11、18）、宮殿建築や庭園建築の現存実例には、平天井室はほとんどない<sup>(39)</sup>。住宅建築では、クーシュク形式に 3 例（No. 17、18、23）、中庭形式にダヴィード邸のナレンジェスターン（図 3）やイマーム・ジョマー邸（図 4）など 9 例（No. 26～30、41～44）がある。「平天井室」も木造架構空間を住宅へ導入した際の一つの変化形とみなせるの

ではないだろうか。なお、カージャール朝期の住宅にも平天井室の例は多い<sup>(40)</sup>。

これらから、サファヴィー朝期以前から木造建築伝統の中で培われた柱の使用が、サファヴィー朝期の宮殿建築において広大なターラール空間を生じさせ、同期のイスファハーンの邸宅建築においては簡略化された列柱廊や平天井室の形で用いられ、その後も住宅建築において踏襲されたと考えられよう。なお、ターラール、列柱廊では、奥は必ず部屋に接続し、前室空間としての役割を果たしている点にも注目できる。また、平天井室は庭に面する例が多いので、列柱廊の柱間空間を間仕切りでふさいだ形として平天井室が住宅に使われるようになったのではないだろうか。その結果としてイマーム・ジョマー邸のように奥行方向に横長平面の平天井間を2室接続させた例も現れたと考えたい。

前3種が木造まぐさ式の平天井を頂いていたのに対し、以下の4種は煉瓦積の曲面架構を戴く。イーワーンやドーム・イーワーンは庭に面してアーチ形のおおきな開口部を有する。

「イーワーン」が主室として用いられたのは、現存例36例中4例と比較的少ない (No.1, 25, 45, 46)。

「ドーム・イーワーン」を中心として左右に閉じた部屋を配する形式はかなり多い。現存例数を調べれば、独立棟式4現存例中1例 (No.2)、クーシュク形式6現存例中3例 (No.19~21)、中庭形式25現存例中12例 (No.31~40, 47, 48) とほぼ半数を占めている。したがってドーム・イーワーンは、住宅建築において定型化していたことが推察される。奥行が閉じてしまう一室のもの (ダヴィード邸、カーヘ・サファヴィー) が16例中12例と多く、背後にドーム室や2層構成の部分を連結させる奥行2室以上のもの (マルター・ピートルズ邸) は16例中4例と少ない (No.2, 21, 47, 48)。なお、ドーム・イーワーンの平面形は、正方形が基本であるが、両側部に腕を伸ばし長方形となるものや、3方に腕を伸ばすもの、四方に腕を伸ばし十字形となるものがみられた (図3)。

イーワーンとドーム・イーワーンでは開口部の処理の仕方には多少の差異が

見られる。イーワーンは、本来はアーチ全面を開口させ、ここに建具をつけるようになったのは近年の改装であると思われる。一方、ドーム・イーワーンでは、当初からファサードに建具を入れることもあったようだ。したがって、イーワーンは先のターラールや列柱廊に対応する開放的空間で、ドーム・イーワーンは先の平天井室に対応して、庭に大きく開口しながら室内化された空間ということができよう。

「ドーム室」は、ドーム・イーワーンと形態的にはほぼ同じであるが、ドーム・イーワーンが庭に直接面している室であったのにたいし、必ずなんらかの先行する室があってその背後に接続する。ドーム・イーワーンと同様に、その平面は必ずしも正方形とは限らない。

「横断ヴォールト室」は形態としてはイーワーンの開口部を構造壁でふさいだ形である。用いかたには2種類ある。①チェヘル・ソトゥーンに見られるように中軸上に配されドーム室をより大規模化した場合と、②スークヤース邸のように側部に配され副次的要素となる場合である。

上記7つの構成要素は天井高の高いものである。天井高の高い部屋の奥に2層構成の部屋が接続する場合には、ラングラズハー邸No.44やシェイフ・アル・イスラーム邸No.49に見るように下階はシャー・ネシーンと呼ばれる装飾豊かな小部屋となり、上階は主室をみおろす2階部屋となる。

なお、主室部に関してはどちらに正面を向けているかという点も重要である。太陽との関係で主室が夏を旨とするのか冬を旨とするのかが決まる（表2に方位を表記）。

### 3. シャルダンの記述した住宅

シャルダンの「イスファハーン誌」の中には、総計120棟を超える住宅が取り上げられている。ただしその大半の記述は、住宅の位置、住宅の持ち主、或

イスファハーンのサファヴィー朝期の住宅に関する一考察

No.	名称	位置	住居形式
O	ミルザ・レジ	ハサン・アーバード門の外	新市街 独立棟式
P	特別セドル	アッバース・アーバード	新市街 独立棟式
Q	アジズ・アッラの息子	アッバース・アーバード	新市街 独立棟式
R	マハメド・タヘル	アッバース・アーバード	新市街 独立棟式
S	12トマン	王の広場の東側	旧市街 中庭形式
T	砲兵隊長	古広場の南東	旧市街 中庭形式
U	ヤルチ・バシ	大バーザール	旧市街 中庭形式
V	サンジェル・ミルザ	シャー・シャハン	旧市街 中庭形式
W	犬の家	古広場の近く	旧市街 中庭形式
X	アリ・ベク	ハサン・アーバード門の外	新市街 中庭形式
Y	モクファトのセドル	マスジデ・ソルヒーの近く	旧市街 不明
Z	クリスタルの館他	新広場の近く	宮殿域 門上階式

表3 シャルダンの記述による考察対象

いは併存する公共建築に終始している。ただし、以下に述べるいくつかの家については建築的に詳細な記述を残している。これら詳しい記述の残る家に関して先の分類と照合したうえで、その記述を検討してみよう（表3）。

### 3-1. シャルダンの記述にある独立棟式住宅（図9）

先の類型の「独立棟式」に属する周囲に塀をまわした邸宅と解釈できる例が4棟ある。一番目はミルザ・レジ屋敷と呼ばれるハヴァ・ベグム邸である（図9-①）<sup>(41)</sup>。ハヴァ・ベグムはアッバースI世の娘である。シャルダンの時代には息子のミルザ・レジが住んでおり、ハサン・アーバード門の外側に位置していた。屋敷は「客を迎え、場合によっては客を泊める本館」と「主人が妻子と生活を共にするハレム」からなる。一般にこの空間分割について、前者はビールニー、後者はアンダールニーと呼ばれるので、以下ではこの用語を使う。

ビールニーの本館は広い庭園の入口に建ち、方形の建物で高さ1メートル奥行2メートルの基壇上に建つという（図9-①-b）。四方の空に向かって開く4つの大広間とその間の2階建て部分からなるという部分は、復元が難しい。今まで検討した住宅実例から推察すると、おそらく5の目プランの形状が適合

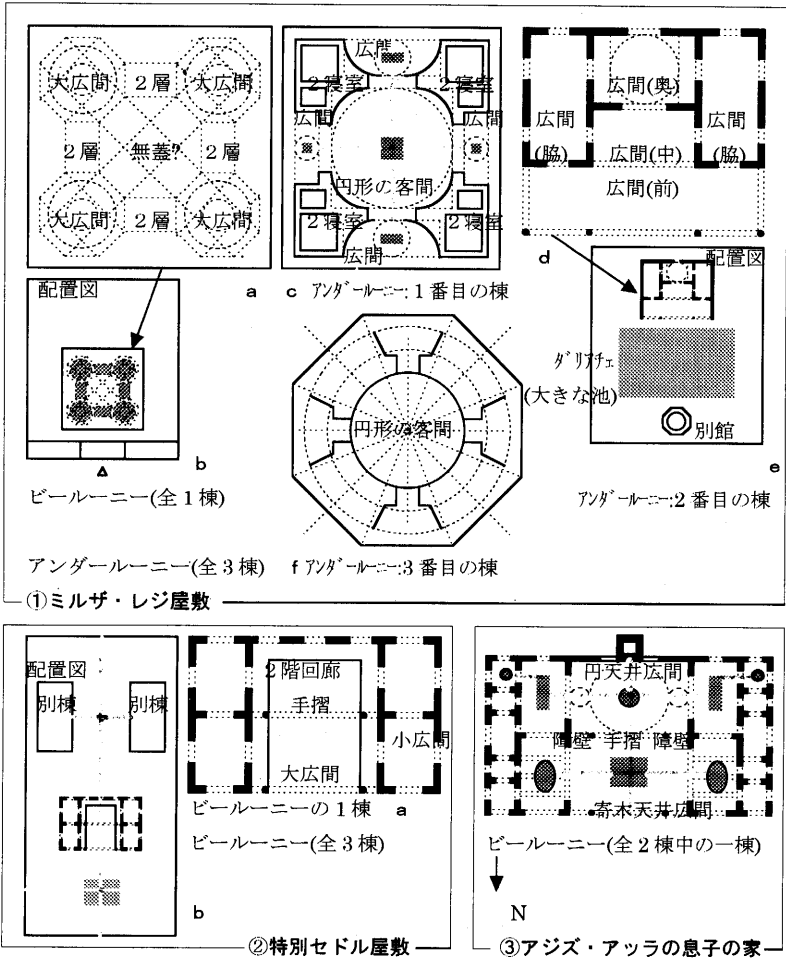


図9 シャルダンの記述した独立棟形式邸宅の仮復元図

すると思われる。しかしながら、四面が等価な5の目プランの実例はサファヴィー朝期の住宅や宮殿建築には現存しない。ムガル朝の墓廟建築の5の目プランの発展から考え、8角形の隅の広間とそれをつなぐ矩形部分を想定すれば、シャルダンの記述に合う平面を求めることができる。ただし、4つの大広間に挟まれた中央広間に関する言及がない。現存事例にはないながら、もしかすると中

中央部分は無蓋の吹き抜けとなっていたのかもしれない(図9-①-a)。なお、生活関連施設は正門の横にあるという部分から、街路に面する敷地の門側に建物列が造られていたことが推察される。

一方、ハレムは嚴重に扉を巡らした敷地の中にあり、庭園の真ん中か入口に建つ3つの豪華な棟からなるという。1番目の棟は「円天井の付いた大きな円形の客間」と「四隅にある2つは長方形で2つは楕円形の4つの広間」と「2つずつ各隅の角にある8つの寝室」からなるとあるので、おそらく5の目式の平面であろう(図9-①-c)。「建物には全部で5つの円屋根が載っていて」とあるので、おそらく、中央のドーム室と直交軸上のドーム・イーワーンの構成である。しかも四隅の広間の平面形状が対になっているので、完全な5の目プランではなく、ハシュト・ベヘシュトのように主軸と副軸をもった平面であろう。「四方の広間と中央の円形大広間の間の仕切りはガラスのはまった障壁だけである。」とあるので、オロシーが仕切りに使われていたのであろう。

2番目の棟の構成はチェヘル・ソトゥーンやアーイーネ・ハーネのような形状が思い起こされる(図9-①-d)。奥行方向に3つならぶ広間については、ターラールあるいは列柱廊と平天井室、奥に鏡細工のムカルナスに覆われたドーム室が連なり、両脇に側室を備える部屋構成になっていたのかもしれない。そして正面にあるダリアチェ(大きな池)のむこうに小さな別館がついていたという(図9-①-e)。

3番目の棟は円屋根を頂く円形の客間ということから、中央広間の廻りに部屋列をまわしたエマーラテ・ゴルダステ(図7-②)やバーゲ・ハルガのような構成と思われる(図9-①-f)。現存建築としては、用途は異なるがパルディス大学の講義棟に改装されたタウヒード・ハーネのような建物が同類に属する。

2番目に取り上げる特別セドル屋敷<sup>(42)</sup>は(図9-②)、アッバースⅡ世の妹を妻とした高位聖職者の家で、アッバースⅠ世が新住宅地として開発したアッ



バス・アーバードに位置する。シャルダンは、「屋敷の建築が行われていたときに私は滞在していて見物していた。」という。

先のミルザ・レジ邸で本館と称された客用の建物、すなわちビールニーはこの屋敷では3棟からなり、そのうち1棟の見事な建物について詳細な記述がある。なお、ビールニーに劣らず見事なハレム（アンダールニー）を備えていたという。ビールニーの「見事な建物はペルシア式に庭園に囲まれている。」とあり、大きな庭の囲いの中で、正面に長方形の泉水を配して独立建物が建つ様子が伺える。また「美しい続き部屋であるこの大きな棟の他に、ほとんど同じような男客を迎えるための棟が別に2つあって」という部分は、同じような独立棟が大きな庭園の中に配されていたと解釈できる（図9-②-b）。

その見事な建物とは（図9-②-a）、正方形の大広間があり、その広間は中央で手摺で二分され、奥の広間の床が60cm高く、周囲に4つの小広間をもつといい、スークヤース邸（図2）のような間口3室奥行2室の6室構成の様子が伺われる。天井が一枚仕立てのモザイクという点からはイマーム・ジョメー邸（図4）のハウズ・ハーネの剥落天井の姿が想起でき、これらをあわせれば、イマーム・ジョメー邸で記述した平天井を頂く前後2室構成の広間であったと思われる。そして「この広間の両側には天井までの半分の高さのところに回廊が設えてあり、中央の手摺で仕切っており、ところどころでも廊下が広間を横切っている。」とあり、スークヤース邸やイマーム・ジョメー邸で紹介した2階通路が廻っていたようである。ほかに「たくさんの小部屋、寝室、アルコーブ、隠し階段、無数の快適な設備」があるということから、同じく間口3間奥行2間のスークヤース邸のように、2層構成で複雑な部屋配置をうかがわせる。

ただし平天井をいただくと思われる大きな広間が25メートル四方という記述は、構造的にも無理があるように思われる。3分割の曲面天井をいただくチェヘル・ソトゥーンの広間でも間口23メートル奥行11メートルで、平天井を頂くものとして最も広いのはシェイフ・アル・イスラーム邸の間口13メートル奥行

5.5メートルで、間に2本柱を入れるにしても十数メートル四方が最大であったと思われる<sup>(43)</sup>。

3番目に取り上げる大宝石商アジズ・アッラの息子の家は(図9-③)<sup>(44)</sup>、アッバース・アーバードのチャハル・スーの近くにあったという。ビールーニーとして大きな棟が二つあり、このビールーニーの入口の両翼には生活関連施設が備わり、アンダールーニーたる後宮は別にあるという。

ビールーニーの大きな棟に関する記述は、「建物の外側のいつも日の照り付ける3方には…建物を取り巻く庭園には、…」の部分から独立棟式であったことが伺われる。建物自体は高さが15メートル程(45から50ピエ)で、前後2室構成の主室、各両脇の2室ずつ計4室、および隅の大小の部屋10室という間口5室奥行2室であったようだ(図9-③)。主室は間口12メートル(24歩)奥行8メートル(16歩)の二つの広間からなり、最初の広間(おそらく奥の広間)は次の広間(表の広間)より2段高く、その間には手摺と両脇のオロシーでしきられるという。ひとつの広間はドーム室(円天井に覆われ)で、もう一方は平天井室(モザイクの天井張り)であったという部分から、おそらく平天井室あるいは列柱廊の部分が一段低く、その背後にドーム室が接続していたと推測される。スークヤース邸はクーシュク形式ではあるがこの主室形状に比較的近い。部屋の天井にヴァリエーションがある点、居室相互の間仕切りにオロシー(クリスタル・ガラスの障壁)が多用されていたという点、バード・ギール(風塔)の存在もサファヴィー朝期の住宅を知る上で興味深い。

特筆すべき事項は「入口は小さく、そこを入ったところにそんなに見事で広大な住居が広がっているととても思えない。」という部分で、しかも「ここ何年来、そういう小さな入口がペルシアでは大いに流行していて、今ではもうほとんど屋敷に正門をつけることはない。あるいは仮に作っても、目立つのを恐れて飾り立てないか、あるいはしばらくしてから塞いでしまいさえて、…」とある。1670年代頃から目立たない入口が流行してきた様子がわかる。

主室の形状が詳細に報告されているのは以上の 3 件 6 棟である。主室形状を整理すれば (図 9), ミルザ・レジ屋敷のピールーニー, およびアンダルーニーの一番目の棟は 5 の目式で, 同三番目の棟は点対称平面を持つ。残る 3 棟は 1 軸対称の平面で, ミルザ・レジ屋敷のアンダルーニーの 2 番目の棟はアーイーネ・ハーネ風, 特別セドル屋敷とアジズアッラーの息子の家は間口 3 室奥行 2 室の 6 室構成で, 前者はイマームジョマー邸, 後者はスクヤース邸と類似する。

4 番目の占屋術師マハメド・タヘルの屋敷の記述は短い<sup>(45)</sup>。この屋敷は, アッパース・アーバードのチャハル・バーグの近くに位置する。ピールーニーは広大な庭園の中におかれた 3 つの大きな棟からなるという。

いずれも新市街地にあり, 名の通った人物のお屋敷である。なお, 以上 4 件は高くとも 2 層であるが, 独立棟式ながら王宮や庭園のパヴィリオンにはより多層建築の記述もある<sup>(46)</sup>。

### 3-2. シャルダンの記述にある中庭形式住宅 (図10)

庭に囲まれて棟が建つ「独立棟式」ではなく, 中庭の周囲に部屋列が並ぶ例を辿ってみよう (図10)。第 1 番目はシャルダンがイスファハーンで住まいとしていた 12 トマンの家である<sup>(47)</sup>。位置は王の広場の東側, 現在のゴルバハルにあたる区域にあったと思われる。中庭形式であったことをうかがわせるのは, 「私の家のテラス (屋上) がこの家 (隣のよく似た建物) に面していた。…境の仕切りによじ登ってみた。」とある点で, 隣の家と接してたてられている様子が伺えるからである。

しかもこの区域は市壁 (地図の点線) 内にあたり, サファヴィー朝期以前から市街化が進んでいたと目される地域で, 前述した市壁内の現存住宅遺構は 1 例 (No.17) をのぞくとすべて中庭形式をとっている。この地区はオフターデ邸 No.47 の近傍にあたり, 中庭形式をとるオフターデ邸は, 12 トマンの家を復元す

イスファハーンのサファヴィー朝期の住宅に関する一考察

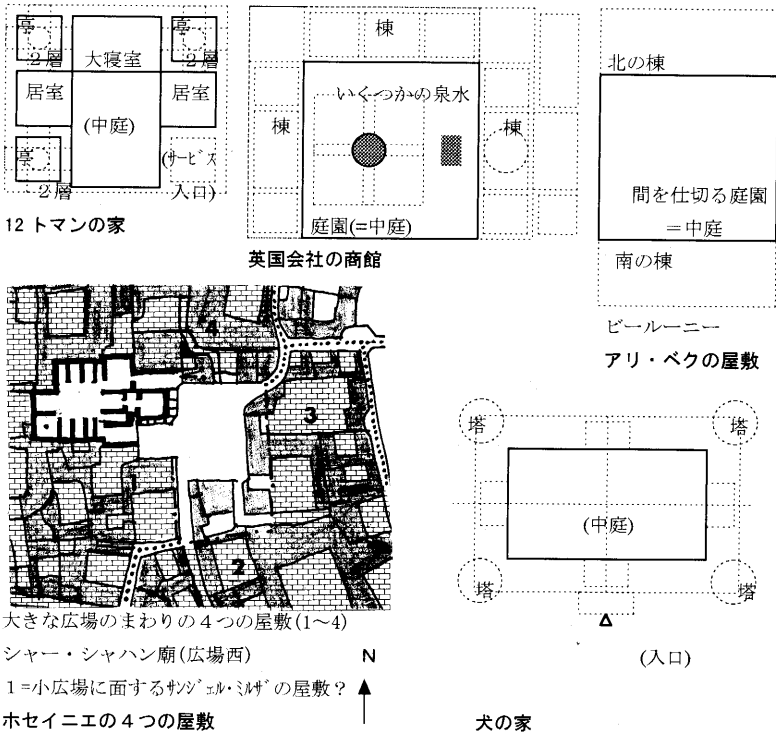


図10 シャルダンの記述した中庭形式邸宅の仮想復元図

る上での参考となった。

同じような記述はカルメル修道会の建物となった砲兵隊長の家にもある<sup>(48)</sup>。この家は古広場の南東にあたる市壁内にあったようだ。「近隣に住む誰かが晩方自分の家のテラス(屋上)にあがると、…テラスから隊長の家の奥を見ることができる…」とあり、中庭形式の家が建ち並んでいた様子が伺える。

「12トマンの家」の建物の構成は「大きな寝室、2つの居室、それぞれ2層になっている3つの小さな亭からできている。」という部分は、中庭形式の現存実例と照合し、以下のように解釈したい。中庭の3辺それぞれに天井高の高いひとつの大きな部屋を取り、隅部分の3ヶ所に2層になっている3つの亭を

配する。中庭の 1 辺は壁となり、入口はどこに設けられていたのかは不明ながら、街路に面する入口を入ると 3 辺の部屋列をもつ中庭が広がっていたと思われる。亭とはイマーム・ジョメー邸にあるハウズ・ハーネ（写真13）のような形式をさすのではないだろうか。そしてこの亭のまわりには小さな部屋や壁のへこみがたくさんあったという。後宮の建築の叙述にある「金箔を貼った木の円柱に支えられた 3 層のサロンがある。」という部分もハウズ・ハーネと類似する部分を現すのであろう。隅に 2 層の部分が配されたと仮定すれば、大きな寝室は両脇に 2 層の亭を有する訳で、ダヴィード邸のように両脇の上部から寝室をみおろす部屋が設けられていたのかもしれない。

第 2 番目は英国会社の商館となっていたヤルチ・バシの邸宅は<sup>(49)</sup>、彼が建てたモスクや隊商宿の近くにあり、大バーザールに面していた。大バーザールはその背後に隊商宿や背後にマドラサや小モスクを備えているが、これらはほとんど中庭建築である。「広大な屋敷で 3 つの棟と美しい庭園がひとつ、それにいくつかの見事な泉水からなっている。」という部分はこの立地条件からして、大きな庭園のように複数のハウズを備えた中庭があり、そのまわりの 3 辺が建物となっているものと理解できる。

第 3 番目はサンジェル・ミルザの家（ホセイニエの 4 つの屋敷）で<sup>(50)</sup>、マスジディ・ジャーミの北方にあたる。現在でもサヘ・シャー・シャハンとよばれる小広場があり、西側にシャー・シャハン廟、南側にはカージャール朝期のカフカシアン邸とガズヴィニーハー邸があり、この 2 棟は文化財保存事務所として修復されている。

大きな広場のまわりに 4 つ、その（ホセインの血をひくと称する名家）屋敷がある。」とあり、なかでもいちばん大きな屋敷は「この屋敷の前は小さな方形の広場になっているが、7 段の石段をあがってイスファハーンの街でもいちばん大きく、いちばん目立つ門の一つといえる門を入ると方形の大きな中庭に出る。」とあり、小広場に面して中庭形式の家がある様子が伺える。

4番目はアッバース I 世が王宮が建てられるまで数年間住んだと説く「犬の家（狩猟頭の持ち物）」で<sup>(51)</sup>、古広場のすぐ近くにある。「総煉瓦造りで四隅に大きな塔を備えている点で、ヨーロッパ風な建て方になっている。」とあり、おそらく矩形の敷地の四隅にバ스티オン風の塔が建っていたものと思われる。シャルダンは外観を見てヨーロッパの城郭建築を想起したのだろうが、こういった形式は中央アジアのティムール朝の宗教建築に多く、サファヴィー朝の実例としてはシーラーズのマドラセ・ハーンも同様な形態をとる。また時代は下るがシーラーズのザンド朝の宮殿も類例といえる。庭の記述はないものの、これらの塔を備えた建築の諸例、およびこの屋敷の位置からして、この住宅もおそらく中庭式の建築であったと思われる。

上記5棟は市壁内にあり、まわりは密集市街地が広がっていたと思われるものである。5番目のアリ・ベクの屋敷<sup>(52)</sup>はハサン・アーバード門の外側に位置し、先のミルザ・レジ屋敷の近傍にあった。「男の住む部分は2つの棟からなっており、一つは南、もう一つは北にあって、間を仕切る形で庭園がある。」との部分からジョルファのダヴィード邸のような敷地の南辺と北辺に棟がたてられていたと思われる。

古広場の北東にあたる部分を描いた記述には<sup>(53)</sup>、「この限界がいわゆる旧市街である。…家々は小さくて低いし、ぎっしり詰まっており、他の街区の家にあるような庭などもない。」とある。この部分はどう捉えるべきであろうか。サファヴィー朝期まで遡ることはできないながらも、現代に残る伝統的住居はほとんど中庭を有する。今まで言及したような大邸宅の大きな中庭には及ばないかもしれないが、これらの家々も小さな中庭をもち、外壁を共有するように家々が密集し、旧市街地を作り上げていたのではないだろうか。後に続く、「路地は暗く狭く、…、全くの迷路で、」という部分は、現状の袋小路や、ひとつのハシュティー（8角形玄関広間）からダーラーン（通廊）を通じて導かれる家々、街路の上に建物が張り出し街路を覆っている部分などいわゆる旧市街

地の街路状況が書き綴られているものと解釈したい。

### 3-3. 「クーシュク形式」と「門上階式」

「独立棟式」と「中庭形式」の他に興味ある記述を拾ってみよう。マズジデ・メスーリの近くに位置したと思われるモクファートのセドルの屋敷の記述に<sup>(54)</sup>、「広々とした中庭や大きな庭園がいくつもあり、」とかかれ、大きな屋敷にはビールーニーとアンダールーニーがそれぞれ別な建物群あるいは中庭となるだけではなく、それぞれが複数の中庭や庭園を有することもあったらしい姿が受取れる。諸処にアンダールーニーは外界から隔離されるよう高い塀をまわした記述はあるが、各々の内部の庭園同志の境界あるいはその連なりかたについては不明な点が多い。庭同士の関係に言及したものはないため、複数の庭をもつことがわかりながらもクーシュク形式に対応する住宅の記述はみつけることはできなかった。

ただし、王宮の愛妾たちの住居部分の記述において<sup>(55)</sup>、「大きな館の向こう側正面に横長の建物があり、そこには30の小さなアパートマンとその真ん中に大きなアパートマンがある。…この建物は二重構造になっており、前方と後方で庭に向かって開いている。異なった季節に対応できように、一方は北向、もう一方は南向きとなっている。」という部分は、クーシュク形式と理解してもよい部分である。

先の分類において宮殿と庭園にしか実例をみいだせなかった、「門上階式」については、以下の記述が興味深い。「新広場から王宮までの間」にでてくる<sup>(56)</sup>「裏側に美しい庭のある二つの館の間を通る。」「通り全体が大きな柱廊となったところをとおる。その上部は亭となっており、「クリスタルの館」と呼ばれている。」とあり、門の上階に主室が建つ住宅が存在したことを思わせる。

### 3-4. 住宅に用いられた装飾技法

最後にこれらの住宅に見られる装飾技法を現存例と照合しながらまとめる。材料に関するシャルダンの記述にはスタッコ細工と木細工が目立ち、タイル細工や石細工の叙述は少ない。

スタッコ細工の記述としては、絵画が描かれたり、青と金で銘文が刻まれる場合が多い。現存住宅においては、スタッコの絵画や文字紋は後の時代の装飾が上塗りされ、本来の姿を見ることは難しい。

絵画が描かれる場合、ミルザ・レジ邸のアンダールーニーではタイル細工の腰壁上部に人物画が描かれ、その題材は裸体画や愛欲図であったという。絵画の現存例としては、スークヤース邸のドーム室では、ペルシア風の人物画が後補の装飾の下から掘り出されている（写真19）。これは同邸の列柱廊にあるヨーロッパ風の絵画と好対照をなしている（写真20）。

金のアラベスクの記述では、先に述べたミルザ・レジ邸の広間で「円天井は分厚く金と群青で唐草文様が描かれている」とあり、金の折置き細工のなされたジャワード・ナーエル邸の壁面を想起させる（写真21）。現存する曲面天井は必ずスタッコで仕上げられている。現存する平天井についても、寄木細工の場合は限られ、大半はスタッコで上塗りされることが多い。特別セドル邸の天井が地上で仕上げられた1枚仕立てのモザイクであるという記述は、イマーム・ジョマー邸のようなスタッコ板であったかもしれない（写真22）。

文字紋の記述は、様々な形の群青色の枠囲みの装飾に描かれる場合が多いが、ミルザ・レジ邸においてピールーニーの広間では、ダヴォールと思われる壁面上部の帯状のカルトゥーシュ装飾がなされていたらしい。その内容は、「宗教的霊性の輝きを読み取れることができる。」もの、「エスプリに富んだ詩句や警句」、「銘句のあるものは優しく官能的な思いを表し、あるものは教訓を示している。」ものなど変化に富み、シャルダンはいくつかの句をひいている。枠囲みやダヴォールに文字紋が残った住宅実例は少ないが、モスク等の宗教建築には





写真19 スークヤース邸の人物画



写真20 スークヤース邸のヨーロッパ風の絵画

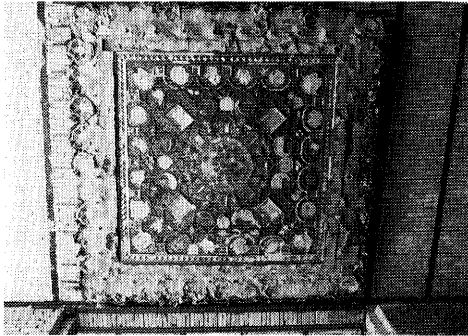


写真22 イマーム・ジョマー邸のスタッコ天井

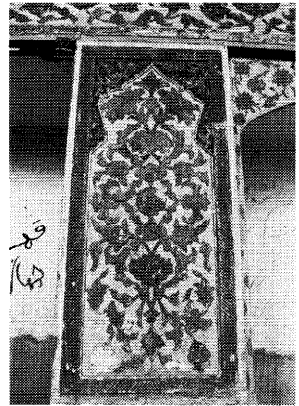


写真21 ジャワード・ナーエル邸の壁面装飾

頻出する形式である（写真23）。

また、葡萄酒庫の記述に出てくる壺型の壁面装飾<sup>(57)</sup>も、スークヤース邸（写

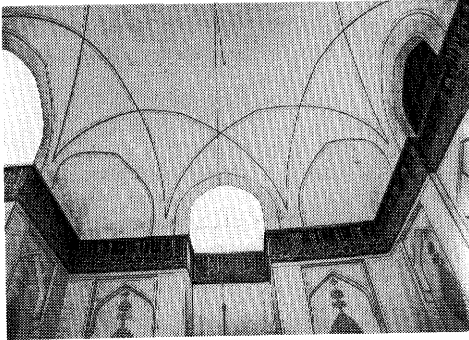


写真23 シャー・シャハン廟のダヴォール(ティムール朝期)

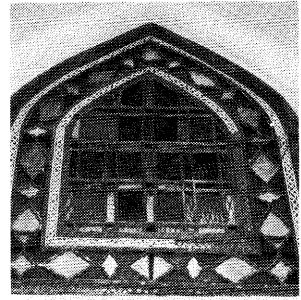


写真24 シェイフ・パハイー邸のハメコロシ窓

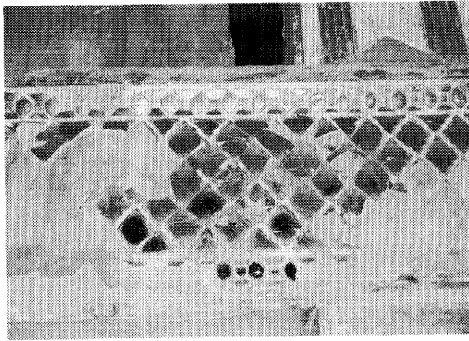


写真25 ハシュト・ベヘシュトのエイネ・カーリー

真6)やダヴィード邸(写真3)などにあるトング・ボリーの現存実例と照合するとスタッコ製であったことが分かり、その奥行は30センチメートルほどである。

木の細工に関する記述は、柱、天井、手摺にみられ、木の柱や手摺は金箔を貼ったり、金泥で塗装して用い、天井には寄木細工がなされたようだ。ミルザ・レジ邸のアンダルーニーの2番目の建物の平天井には、香木、象牙、碧玉、雪花石膏(アラバスター)で象眼細工された天井の様子が描かれる。現状では塗装ははげてしまっているがスークヤース邸の列柱廊の天井には寄木細工の格天井がのこっている(写真4)。なお、ガラスのはまった障壁という記述については、木のオロシーに相当すると思われるが、骨組み材料についての特記はな

い。なお、ハシュト・ベヘシュトの記述部分には、「窓枠は銀でできており、様々な色のクリスタル・ガラスや上質の窓ガラスがはまっている。」との記述がある<sup>(58)</sup>。しかしながら金属枠のオロシーは現存実例にはみられなかった。

石細工の記述は部屋の腰壁と床、庭園の通路や泉水にみられる。チェヘル・ソトゥーンの記述には「彩色され金箔を捺された大理石」とあり<sup>(59)</sup>、ターラールの腰壁の大理石を見れば、金箔は剥落しているものの彩色が幾分かは残っている。また、ミルザ・レジ邸のアンダールーニーの2番目の棟の奥の間につかわれた腰壁に用いられた碧玉の記述は、マスジディ・シャーなどに用いられる緑がかかった大理石のことを現しているようだ。

タイル細工としては、ミルザ・レジ邸のいくつかの部屋に用いられた「像が描かれた陶製タイル」という部分は絵付けタイルをあらわし、同アンダールーニーの三番目の棟の腰壁の「繊細な彩釉タイル張り」という部分は、モザイクか絵付けかは不明ながら、幾何学紋様あるいはアラベスクのタイルをあらわしているようだ。現存住宅にタイルが残る例は探し当てることができなかった。

最後に鏡細工として、様々な色のクリスタルガラスでできたはめ込み窓という記述は多い。ダヴィード邸のナレンジェスターンやシェイフ・バハイー邸などいくつかの現存例にサファヴィー朝期まで遡る表面が波打つガラスがオロシー(写真10)やハメコロシの窓(写真24)に使われている。これらの遺構からはガラスは橙、青、緑、紫、透明が基本の色使いであることが観察できた。色ガラスは細かく刻まれ、木の枠にはめ込まれる。紋様は単純な斜め格子や複雑な星形幾何学紋様である。またいくつかの住宅には、鏡面をカットして壁や天井にはめ込むエイネ・カーリーも使われたらしい。ただし、現存遺構としてはチェヘル・ソトゥーンやハシュトベヘシュトの宮殿建築に観察できたのみで、それらの鏡は凹面をなしていた(写真25)。

住宅にみられる装飾の技法に関しては、統一性よりもヴァリエーションを好む傾向が読み取れる。アジズ・アッラの息子の家の記述で、シャルガンはそれ

ぞれの部屋の天井が異なることを指摘している。天井架構を技法的にみると、木造架構の平天井と煉瓦造の曲面天井がある。この区別についてはシャルダンも諸処に注記している。現存する曲面天井では、ムカルナス（写真3, 8, 15）、交差アーチ（写真5, 16）、横断ヴォールト（写真6, 17）がある。シャルダンの記述には曲面天井の種類についての言及は少ない<sup>(60)</sup>。

邸宅や宮殿では、庭園だけでなく建物内にも水を用いた装置の記述も各所に見受けられる。セアデト・アバドの離宮の邸では、「素晴らしい屋敷の噴水などが吹き上がるときは、不思議の国にいる思いがする。何しろ、自分のまわり中、目に入るのはただただ噴水ばかりなのである。・・・3階建ての大きな8角形の邸である。テラスの上から吹き上がる水が建物のまわりに落ちかかり、窓から手を出すとまたたく間にぐっしょりと濡れてしまう<sup>(61)</sup>。」、また後宮の3層のサロンに記述には、「洞穴とでもいうべきものである。なぜなら、いたるところに水があふれ、各階の周りの狭い水路を滝のように流れているからである<sup>(62)</sup>。」とある。噴水、滝、泉、水路など様々な技法で建物の中や外に水が引き込まれている様子を読み取れる<sup>(63)</sup>。スークヤース邸のドーム室やイマーム・ジョマー邸のホーズ・ハーネのような泉を中心に置く部屋は、カージャール朝期の住宅にも引き継がれ、素晴らしい建築を残している。おそらく先に指摘した建物に水を引き込む伝統が継承された結果であろう。

また庭と居室空間の境界には基壇が設けられかなり高い段差があるという記述にも注目できる。ミルザ・レジ邸のビールーニーの周囲には「高さ3ピエ（約1メートル）、奥行6ピエ（約2メートル）の石段が走っている。」とあり、アンダールーニーでも「どの棟でも地面から、3、4ピエ基礎が高くなっている」とあり、庭が眺める対象になっていたことを物語る。これは室内の生活が椅子式ではなく座式生活であったために、座ったときの視点を高くする意味でも必要性があったと思われる、カージャール朝期の住宅にも受け継がれる。

シャルダンの言葉を借りれば、「生まれつき人生の快楽の追求に格段に熱心

でもあるので、豊かに人生を楽しむことを望む…」<sup>(64)</sup> ために、当時の人々は気持ちのよい住宅を建てたのであろう。シャルダンにはハシュト・ベヘシュトをそぞろ歩きながら、「こういう小部屋やアルコーブを片端から通り抜けているうちに、すっかり心がとろけてしまい、ありていに言ってしまうと、いつも外に出るのが嫌になるのである。人間の心がこんな風に官能的な気分になるには、気候がおそらくおおいに与っているにしても、しかし確かにこういう所は、ある点では空中楼閣に過ぎないにせよ、我がヨーロッパの豪華きわまりない宮殿よりも楽しく心地よいものであることに間違いはない<sup>(65)</sup>。」という気分浸っている。

このような気分を醸し出すような宮殿や邸宅がイスファハーンのおちこちに作られ、住生活を堪能する人々が存在したことに注目したい。

#### 4. まとめ

以上、サファヴィー朝期の住宅について現存遺構、非現存宮殿遺構に関する情報、シャルダンの解釈をまとめれば、庭と主室の位置関係から4つの類型を設定できる。①独立棟式、②クーシュク形式、③中庭形式、④門上階式である。独立棟式、クーシュク形式、門上階式は敷地が整形の場合に作りやすい。アッバース・アーバードやジョルファなど、イスファハーンがサファヴィー朝の首都となってから開発された新市街地には格子状の道路が計画され、短冊状の敷地が分譲された。これらの形式は、新都市計画の中で、宮殿や貴顕の邸宅に用いられた。新市街でも中庭形式は採用されたが、中庭形式は中庭さえ整形に作れば、不整形な敷地にも対応することができる。既存の住宅が密接する建て込んだ市街地においては、立派な邸宅を建てるときにも中庭式が採用された。

これらの住宅をみるには、主室の奥行と構成要素に注目することが大切である。主室の奥行は中庭形式においては1室が多く、クーシュク形式においては

### イスファハーンのサファヴィー朝期の住宅に関する一考察

1室と2室が半々、独立棟式においては3室以上である。中庭や庭園といったオープン・スペースから換気、採光、眺望、動線等によって室内を良好な環境とするために、奥行が考慮された。

主室の要素としては、①ターラール、②列柱廊、③平天井室、④イーワーン、⑤ドーム・イーワーン、⑥ドーム室、⑦横断ヴォールト室が重要である。これらの要素を単独（奥行1室）、二つ（奥行2室）、三つ以上（奥行3室以上）と連ねる訳であるが、単独で用いられるのは平天井室、イーワーン、ドーム・イーワーンの3者である。二つ以上連なる場合、庭側に来るのはターラール、列柱廊、平天井室、イーワーン、ドーム・イーワーンで、奥に接続するのは、平天井室、ドーム室、横断ヴォールト室で、その組み合わせかたは様々である。

建築と庭の関係は強く、水、壁画、装飾などが居住のなかに生活の楽しみを加える要素として活用されていたようである。

付言ながら、最初に述べたようなアッバースI世の帝都計画は、邸宅建築にも重要な契機をもたらしたといえよう。王の広場とチャハル・バグ大通りの近傍には庭園が計画され、新市街地はザヤンデ・ルードの両岸に営まれた。都市内の庭園の造営や大河を取り込んだ発展は都市における新しい住まいかたを提案をしたのかもしれない。広大な庭園に配された独立棟式の建築や二つの庭に開くクーシュク形式は、自然にあふれた郊外住居と都市民としてのステイタスを誇示する都市住居の一体化の試作だったのではないだろうか。イスファハーンの新住宅地計画は、都市に住みながら郊外を味わえる住環境と住宅形式を採用したといえよう。

1 モスクについては、拙稿共著、『イスファハーンの現存モスクに関する調査研究(1)～(5)』、日本建築学会大会学術講演梗概集、1995年、pp517-526、マドラサについては、拙稿、『イスファハーンのマドラサ調査から－建築形態と分布状況について－』東洋文化研究所紀要第137冊、平成11年3月、pp257-294にまとめた。

2 羽田正編著、「シャルダン『イスファハーン誌』研究」、東洋文化研究所叢刊、1996

年を用いた。以下シャルダンと略す。

- 3 主たる文献は以下の5冊である。①Karapet Karapetian, "Isfahan, New Julfa: the Houses of the Armenian", Roma, 1974 (以下Karapetianと略) イスファハーンのザヤンデ・ロード南岸にあるジョルファの13棟の住宅が記述されている。No.1からNo.10の北中庭までがサファヴィー朝期の建築で, No.10の南中庭からNo.13までがカージャール朝期の住宅であるとし, 住宅の4類型をおこなっている。②Ed. M. Y. Kiani, *Iranian Architecture of the Islamic Period Vol.2 A List of Monuments*, Teheran 1989, 伝統的建造物のリストである。住宅名称のほかに所在地, 年代, 文化財番号が併記されている。③Ministry of Housing & Urban Development, *Iranian House*, Teheran, 1375, 図面入りの写真集で, イスファハーンの住宅としては6棟を扱う。年代比定はサファヴィー朝期2例, ザンド朝期1例, カージャール朝期3例である。④Ministry of Housing & Urban Development, *New Life - Old Structure*, Teheran, 1374図面入りの写真集で, イスファハーンの住宅としては4棟を扱う。4棟ともカージャール朝期の住宅と記す。⑤Shahid Beheshti University, *Ganjnameh Vol.4 Mansions of Isfahan*, Teheran, 1998, イスファハーンの住宅建築ばかり21棟について, 写真, 図面を用い, 間取りの説明が書かれる。建設年代や住宅の歴史的経緯の説明は少なく, 平面構成に関する個別説明に終始し, 21棟を比較考察した部分はない。
- 4 住宅調査は1994年夏3棟, 95年夏5棟, 98年夏7棟, 99年夏の20棟, 計4度34棟にわたる。この中にはカージャール朝建立と判断される住宅も含む。
- 5 住宅については増改築が甚だしく, しかも住み手も変わるので年代決定はむずかしい。年代決定は, 建立年代のはっきりしている宗教建築や宮殿建築等にあるアーチの形, ムカルナスや交差アーチなどのヴォールティング, スタッコ装飾, ニッチの形, ダヴォール(長押)等との比較による。ただしザンド朝の様式はサファヴィー朝期の様式と区別するのは難しいので, ザンド朝期の創建と記述があるものも考察の対象に含めた。なお, カージャール朝期になってもサファヴィー朝期の様式が踏襲されることもあるので, ここでの判断は, 創建年代を規定するものではなく, サファヴィー朝風のものがある場合には考察の対象とした。特に疑わしいものについては表1の時代の欄にクエスチョン・マークを付した。
- 6 絵画や写真は以下の文献によった。①Ed. by Muhammad Reza Ryazi, *Mir Sayyed Ali & Jean Chardin - Al Esfahan -*, Tehran, 1998以下, Al Esfahanと略する。②Khalifeh Wartans Yuzukchyan, Translated by La'wan Minasyan, *Vasf Banahay Mashuhur Isfahan*, Isfahan, 1378, 以下Yuzukchanと略する。

- ③Mahvesh Alemi, “The Royal Gardens of the Safavid Period-Types and Models”, *Gardens in the Time of the Great Muslim Empire*, pp.72-96, Leiden, 1997, 以下Alemiと略する。④Mahvesh Alemi, “II Giardino Persuano:Tipi e modelli”, *II Giardino Islamico*, Milano 1994, 以下Alemi-1994と略する。⑤ Ernst Holtzer, *Persien vor 113 Jahren*, 以下Holtzerと略する。⑦ Gulru Neçipoglu, “Framing the Gaze in Ottoman, Safavid, and Mughal Palaces”, *Ars Orientalis Pre-Modern Islamic Palaces*, Vol. 23, 1993, pp. 303-342, 以下Neçipogluと略する。⑧Sussan Babaie, *Safavid Palaces at Isfahan—Continuity and Change (1590-1666)*, New York University, 1993以下Babaieと略する。⑨Klaus, Herdeg:*Formal Structure in Islamic Architecture of Iran and Turkestan*, New York, 1990以下Klausと略する。
- 7 Karapetian pp.281-308。ジャーニー邸という名称を用いている。現在、イスファハーン文化財保存事務所の文化財担当者はマルター・ピートルズと呼んでいる。
- 8 Al Esfahan, p.286には、1842年に出版されたトクシェの旅行記に描かれた当宅のパースと平面図が記載されている。これによれば、北面中央のアーチは開口し、オロシーの枠がはまり、南面する2室分は部屋の分割がなされておらず、奥行の深い部屋として描かれている。
- 9 Karapetian p286。本来は北側の大通りからの入口側に冬用建物があ、その一部が入口まわりに現存すると述べている。
- 10 建物の西側には2層の袖壁が通路として設けられ、西側のイーワーンはふさがれている。先の19世紀のスケッチには既にこの形状が描かれている。袖壁部分は北側ファサードと共通したデザインを有するので、19世紀までにはこの部分が増築され、独立棟式ながら三方に開口する建物へと変更がなされたと思われる。
- 11 Karapetian, p.287。
- 12 ベルシア語でクーシュクは別荘、あずまや、宮殿、砦を意味する。
- 13 Karapetion, fig.10。
- 14 Wolfram Kleiss, “Safavid Palaces”, *Ars Orientalis Pre-Modern Islamic Palaces*, Vol. 23, 1993, pp.269-280
- 15 本稿の4分類とカラペティアンおよびクライスの分類との対応関係は以下の通りである。第一の「独立棟式」はカラペティアンのA, クライスの①および②, 第二の「クーシュク形式」はカラペティアンのB, 第三の「中庭形式」はカラペティアンのCおよびD, クラウスの③, 第四の「門上階式」はクラウスの④に相当する。
- 16 ターラーレ・タヴィーレはアリ・カプー背後に位置する細長い庭の中に、奥から



3分の1ほどの位置に描かれた矩形の建物である。この建物については、ケンペルは鳥瞰図の他にスケッチと著作に挿入した銅版画をも残している (Alemi-1994のp. 50, NecipogluのFig.16)。オレアリウスの銅版画はこれによく似ている (NecipogluのFig 17)。シャルダン は間口104歩、奥行26歩、高さ25ピエで中央と両脇の3つの広間からなり、中央の広間の床高8ピエ、両脇の広間の床高3ピエと記している (シャルダンのpp.49-50)。ババイーはいくつかの旅行記を検討した上で、間口3間奥行6間の柱を配した復元図を描いている (Babaieのpl.228)。Klausは敷地をほぼ間口60メートル奥行240メートルに割り付け、その中にチェヘル・ソトゥーンと同様な建物を図中に描いている。

これらを総合すると、おそらく間口5間奥行2間に10本の柱を配したターラール空間が前面にあり、その背後にヴォールトを架けた広間が続き、その両側面に3本ずつの柱を配した列柱廊空間を備えていたと考えられる。シャルダンの記した大きさはターラール空間部分に相当すると考え、間口40メートル、奥行10メートルの値を入れれば、平天井を架ける際の最大スパンが8メートルほどとなり、チェヘル・ソトゥーンやアリ・カブーのターラール空間の最大柱間数値とほぼ一致し、構造的に可能となる。背後の広間はおそらくヴォールト構造で奥にアルコブがあり、両脇に列柱廊空間を備え三部構成となり床段差があったと解釈できる (表2の模式図参照)。

- 17 バーゲ・ボルボルはハシュト・ベヘシュトの位置にあたるが、鳥瞰図に描かれた建物は現存のハシュト・ベヘシュトとは異なり、全体が矩形で、一部3階建ての建築である。これはケンペルが帰国後、スケッチを元に画家に鳥瞰図を描かせた際に生じた不一致と思われ、図中の建物は架空の建築と理解し、考察対象から除外した。
- 18 エマーラテ・ゴルダステは鳥瞰図中には八角形で2層構成、中央部のみ3層がたちあがる建物として描かれている。一方、スケッチには16角形平面の平面図とパースがある (AlemiのFig10および20)。スケッチはかなり詳細に描かれているので、16角形平面の2層構成で中央部に3層目に八角形平面の3層がある建物であったと思われる。図7-③に、クライスの復元図を転載した。
- 19 バーゲ・ハルガは鳥瞰図には16角形平面、2層構成でテント状の屋根を頂くかなり大きな建物が描かれる。スケッチには八角形平面で8つのイーワーンからなる基壇部と吹き放し空間の上層部からなり、テント状の屋根を頂く建築が描かれる (AlemiのFig.23)。本稿においてはスケッチの形状を考察対象とした。
- 20 ウチ・マルタベは鳥瞰図には矩形平面で3層構成、中央部に矩形の塔屋が描かれている。スケッチには平面図と立面図があり、平面図には正方形を9分割した図が描かれている (AlemiのFig.10, 16)。スケッチからすると、中央広間の四方にイー

## イスファハーンのサファヴィー朝期の住宅に関する一考察

ワーンを開口し隅部を部屋とした5の目プランを3層にわたって積み重ねたものと理解できる。このような多層建築はアリ・カプーしか残っていない。アリ・カプーのターラールの階の背後の部分はこの建物を理解するときのヒントとなる (Babaie のpl.31, 49, 69)。アリ・カプーでは中央の広間2層吹き放しのものが2つ重なっているため、ここでもこのような形式が取られていたのかもしれない。

- 21 チャハル・バグ大通りの川岸にあった庭園建築で、間口3間、奥行5間のターラール空間の背後に部屋が続く様子が描かれる (NeçipogluのFig.19)。
- 22 アレミーはケンベルのスケッチから、ヘザール・ジャリーブの中央建築には背後の4イーワーンの建物 (イマーラット) の前面にターラール空間があったとしている (Alemi, p.76, Fig.14)。このスケッチには間口3間、奥行3間の周囲10本と、中央部にある八角形の泉の周囲8本に切断された柱が描かれている。他のターラールの例からしても、格子状に柱を配するのが通例で、ここでもおそらく間口3間奥行3間に12本の構造柱を置き、他の柱は補助的な飾り柱だったのかもしれない。なお、19世紀のユーズークチャーンの絵画には3スパンの間口に大きなドームを戴く建築が中央にあり、両翼部に2層の張り出し部分が描かれている (Yuzukchyan, p.42)。この絵については、張り出し部分は後補の部分と理解しても、3スパン全体にわたるドームはケンベルのスケッチとは適合しない。またユーズークチャーンの記述にはターラール空間を示唆するような部分はない。本稿では、ケンベルのスケッチに従い、ターラール空間の背後に5の目プランが接続していたとみなす。
- 23 ターラール・アーイーネについてはコステは2枚の絵画のほかに立面図、断面図、平面図をえがき (Al-Esfahan, pp.265-266)、フランダンの著作には正面からと背面からの2枚の絵画が挿入される。これらは間口3間奥行4間のターラール空間の背後に平天井室が続き、その奥にドーム室と背面に開口するイーワーンが続く (Al-Esfahan, p.234)。19世紀のユーズークチャーンの絵も同様で14本の柱を有する (Yuzukchan, p.)。ホルツァーの写真集の174頁に載るアイネ・ハーネの写真はチェヘルソトゥーンの誤りで、179頁に載るハフテ・ダストの手前に写る写真には同様の柱配置のターラールが写っている。
- 24 ゲーチェ・ハーネは間口3室奥行3室2層構成で、正面側は両脇の浅いイーワーンと中央の深いイーワーンからなり、側面は3つ共に奥行の浅いイーワーンからなる。おそらく中央部に2層分吹き抜けのおおきなドーム室を配し、中軸上の2面にイーワーンを設け、両脇を2層の部屋列とした構成であったと思われる。(Yuzukchyan, pp. 58-60)
- 25 ハフテ・ダストは横長1列の建築で、隅のボルジュがあり中央部に主室部 (シャー・

- ネーション) がある。100室もの部屋があり、ハンマームも備えていたという (Yuzukchyan, pp.56-58)。ホルツァーの写真帳にも数葉の写真があり、様子がよく分かる (Holtzer, pp.178-179)。ユーズークチャーンの絵はザヤンデ・ロードの下流、東側から描いたものである。ホルツァーの写真にある西側のファサードは、中央部に突出部分があり、そこは中央の平天井室、両脇の横断ヴォールト室、その両脇の列柱廊からなっている。ただしこの列柱廊の類例は現存建築には存在しない。
- 26 基壇上に建つ間口3間の建物として描かれている (Yuzukchyan p.63-65)。奥行方向および部屋構成が不明なので対象からは除外する。なおこの建築についてはシャルダンにはサロモンの玉座亭として言及がある (シャルダン pp.174-175)。
- 27 バーゲ・ゼレシュクはチャハル・バグ大通りの西側、アッパース・アーバード運河の南側に位置する庭園で、コの字型の平面をもつ独立棟式の建築が敷地の中央部に建つ (Holtzer, pp.180-182)。この建物はホナルファーの490頁にも側面からの写真がある。おそらく中央に吹き抜けの横断ヴォールト室があり、張り出し部分は先のヘザール・ジャリーブの中央建築の翼部と同じように見晴台として建てられたのではないだろうか。
- 28 不等辺八角形の平面を有する2層構成の建築で、周囲に列柱廊をまわす形式である (Holtzer, p.183)。中央広間の直交軸上に4つのイーワーンを配しその間を2層の部屋とする5の目プランであったと思われる。
- 29 Alemi, Fig.22 本稿の考察対象からは除外した。
- 30 シャルダンの166頁記載。Shahab Katouzian, "The Sense of Place in Persian Gardens", *Environmental Design The Garden as A City*, pp.42-47に拡大図が記載されているが、これらの建築に関する考察はない。注29と同様に本稿の考察対象には含まない。
- 31 アーレミーはサファヴィー朝期の王立庭園の建物を考察する際に、ターラールとイーワーンという空間概念が重要で、イーワーンは4イーワーン・プランとなる。イーワーンとターラールの組み合わせがサファヴィー朝期の宮殿建築の重要なテーマであったとのべる。門の上階の宮殿やサファヴィー朝以前からあった基本的なクロス・プランなど形態や規模は多様であると説く。Alemi, pp.76-78
- 32 5の目プランは、宮殿建築とならんで、ティムール朝やムガル朝の墓廟建築でも発展を遂げた。拙著、「複室型墓廟におけるドームの配置—ティムール朝時代の墓廟建築に関する研究7」、日本建築学会大会学術講演梗概集 pp.1335-36 1993、「ウルグ・ベク廟の特徴とその形成過程—同8」、同, pp.1337-38, 1993参照。
- 33 カーヘ・ハルヴァットはチェヘル・ソトゥーンの南側に位置する東西方向に長い

### イスファハーンのサファヴィー朝期の住宅に関する一考察

庭園でケンベルの鳥瞰図には2つの建築が描かれる。チェヘル・ソトゥーンとの境である北辺の中央の建物については、前面に列柱廊を有し、奥が2層となり中央部がアルコーブとなっているスケッチが描かれ、平面図では奥行方向に3分割されている。おそらく、平天井が架かり長柱列によって支えられたかなり広い列柱廊があったと思われる。これは、前述したスークヤース邸や「中庭辺」の実例であるシェイフ・アル・イスラーム邸と似た形態で、サファヴィー朝期の列柱廊を考える上で重要な手がかりとなる。

敷地の西側には5の目プランの平面図が描かれる。ただしケンベルの鳥瞰図にはH形の建物が描かれる。19世紀のフランダンとコステが描いた室内の絵では、矩形平面の室内に泉水が設けられ、泉水の四隅からたちあがる四天柱が中央のランタンを支えるという、現存の建築には見られない建築形態を有する。この室内の状態がサファヴィー朝期の状況を踏襲しているかは不明ながら、この銅版画を考慮すると、5の目プランをとるには無理がある。おそらく、H形の平面で、中央の横長の平天井室とし、その中央部に4天柱があり、両端部の前後に4室を付加した形態であったと思われる。Alemi, Fig.9および19。

- 34 ホシュ・ネヴィース邸とラスーリーハー邸は、ともに現状では主室の奥部は隣家の壁でふさがれている。主室の奥部にオロシーが入り、そのむこうは煉瓦でふさがれているという不自然な形状である。ホシュ・ネヴィース邸は、所有者からの聞き取りによると本来はこの主室の背後はもうひとつの中庭に通じていたのことである。ラスーリーハー邸は平天井室の奥が平面凸字型のアルコーブとなり、この幅の未完成の地下室があり、この奥は中庭になっていたと推測される。
- 35 実例はジョルフアの住宅2例である。なお、ターラーレ・ティームーリーはサファヴィー朝以前の宮殿建築で、イーワーンを用いている。ケンベルの鳥瞰図でこの位置を辿ると、「会計事務所」の表記があり中庭建築にイーワーンが描かれている。ヴォールトや壁にカージャール朝期の改装が多く見受けられ、現状では博物館に改装され独立建築となっているが、サファヴィー朝期にはどのような形態をもっていたか不明である。したがって考察対象に入れていない。
- 36 NeçipogluのFig.12-b, Holtzerのp.101, 199他。
- 37 ターラールのサファヴィー朝建築の導入に関しては、ババイーはサフィー I 世以後、サルタキの有力な推進があったと推察する。Babaie, pp.234-286
- 38 カージャール朝期の列柱廊については、より多くの実例を検討せねばならない。既に収集したカージャール朝期の住宅実例の中で、列柱廊をもつのは31例中8例であった。これらの列柱廊は、サファヴィー朝期からの伝統に加えて、アーカンサスの

- 柱頭などを用い、柱の形態にヨーロッパの建築からの影響を見せるものが多い。
- 39 非現存ながらカーヘ・ハルヴァット№23の4天柱に支えられた部屋は、室内に柱があり、しかも折り上げ天井で、頻出する平天井室と形態は異なる。しかしながら、横長平面で木造架構を用い、正面にオロシーが入るので、平天井室をより広く豪華に作った例とみなしたい。
- 40 カージャール朝期の住宅として収集した31実例のうち、クーシュク形式では2例、中庭形式では10例が平天井室を有している。
- 41 シャルダンpp.15-16, pp.138-140
- 42 シャルダンpp.130-132
- 43 p.62にあるモクファトのセドル屋敷の記述にも、間口が27メートル(84ピエ)の部屋という部分がある。この建物が4類型のどれに当てはまるのかは読解不可能ながら、もしこの数値が正しければ、この部屋は曲面架構を戴く部屋であったと思われる。
- 44 シャルダン, pp.149-151
- 45 シャルダン, pp.148-149
- 46 チェヘル・ソトゥーンの敷地内に建つ「八角形5層の作りで、吹き抜けとなっており、上に行くほど狭くなっている。それぞれの層が曲線的で金箔を張った4本の円柱で支えられている。」というバヴィリオン(シャルダン, p.54)、「干アルバン荘」の記述にある「6番目のテラスのまん中には散歩道を途切らせる形で4階建ての亭が建っている。(シャルダン, p.129)」、セアデト・アバドにある「3階建ての八角形のおおきな亭」など(シャルダン, p.165)は、現存しないながらもウチ・マルタベ宮のような多層建築に対応する。ただし、邸宅の詳述の中に多層建築を思わせる記述はなかった。
- 47 シャルダン, pp.69-71
- 48 シャルダン, p.78。
- 49 シャルダン, p.66。
- 50 シャルダン, pp.112-113。
- 51 シャルダン, p.102。
- 52 シャルダン, pp.137-138。
- 53 シャルダン, p.104。
- 54 シャルダン, p.62。
- 55 シャルダン, p.57。
- 56 シャルダン, pp.64-65。
- 57 シャルダン, pp.51-53。

イスファハーンのサファヴィー朝期の住宅に関する一考察

- 58 シャルダン, p134。
- 59 シャルダン, p.53。
- 60 王のモスクの入口の記述には「様々の形のニッチ」という表現でムカルナスのことを現している（シャルダン, p.38, 209）。ただし、住宅の記述にはムカルナスに対応する表現を見出すことはできなかった。横断ヴォールトについてはアシズ・アッラの息子の家の「アーチ型の天井」が対応すると思われる（シャルダン, p.150）。
- 61 シャルダン, p165。
- 62 シャルダン, p.56。
- 63 シャルダン, p.165。
- 64 シャルダン, p.14。
- 65 シャルダン, p.135。